あごら

今月の発信――あごら大阪
205号

女たちは動いた――
阪神大震災

◆足もとから揺れた――
駒尺喜美・高木由利子・西田冬至子・藤原美和子
澤田和子・サンディ サカモト・山際美代子・山田和枝・吉田悠子
◆女たちは立ち上がった――
芦谷美鈴・岡田芳子・高橋ますみ
◆現地に急行して――
城内治美・堀越由美子
◆被災の町に立って――
斎藤千代
◆阪神大震災とわたし――
◆阪神大震災とわたし――
AGORAZEIN 自立の心理学　しまようこ　ほか

この本を　阪神大震災で被災された皆様にささげます。

阪神大震災は日本の大きな世直しを迫ったように思われます。

この大きな災害を大きな福に変えることによって、被災された方々の悲しみと、ご苦労に応えたいと思います。

なお、この本の売上は、被災者の方々への支援活動に使います。

一部でも多くご活用頂ければ幸いです。

一九九五年三月

あごら一同

阪神大震災と日中両国

張　晶

中国の科学技術新聞『科技日報』の東京駐在編集者として、今回の阪神大震災には、格別の関心があり、現地にも足を運びました。

被災の状況が空撮も含めて全国各地に微に入り細にわたって報道される情報公開の日本には感銘を受けましたが、私は、はからずも一九七六年の中国北部唐山の大震災を思い起こし、中国と日本、それぞれの長所・短所について思いをめぐらしました。

日本の数々の長所の中で、あえて短所を指摘しますと、私が驚いたのは、避難民の無気力さです。唐山では、誰一人、避難所に逃げ込んだ者はいませんでした。被災後すぐ瓦礫を片づけ、小屋を立て、自力更生しました。私は日本の〝いじめ〟に、かねて奇異な感を抱いていましたが、抑圧を自力で撥ね返さない日本人民にも一因があるように思いました。

ある集会で、以上のような感想を述べたとき、その席ではだまってうなずいていたある老婦人が、しばらくたって私に言いました。

「張さん、五十年前、日本の都市という都市は、神戸の何百倍、何千倍もの破壊を受けたのです。その時は避難所もなく、焼けたトタンを集めて掘っ立て小屋を建てたり地下濠で暮らしたりしました。今度の大災害で日本じゅうから救援の手がさし出されたのは、たくさんの人びとが、あの大空襲を思い出したからです。あの時は決して配られなかった水や食糧がどんなに必要かを知っていたからです。今度の震災は、資本主義経済を追求して人間本来の暮らしを忘れかけた日本に対する大警鐘だったと、たくさんの日本人が考えています。それと同時に、戦争を決して忘れるなという警鐘だと考える人も多いのです。戦争はどんな大激震よりずっと悲惨です。日本は二度と戦争をする国にはなりません。そのことを、神はもう一度私たちに誓わせたのだと思います」

阪神大震災と日中両国　張　晶　1
危機管理の第一歩は危機を危機と確認すること　山際美代子　4
阪神大地震を身近で体験して　山田和枝　6
これからが大変！　損保業務　澤田和子　8
ボランティア活動に参加して　吉田悠子　10
姿の見えない被災者——アジアの女たちに思いを馳せて　サンディ・サカモト　12
車はつぶれましたが　駒尺喜美　15
人のやさしさが見えるようになりました　西田冬至子　16
我が家は無事でした　藤原美和子　18
生きることの原点を振り返りました　高木由利子　18

足もとから揺れた

女たちは動いた

地震と草の根ネットワーク　高橋ますみ　20
やりたいことがほんとうにできるネットワーク　岡田芳子　22
ほんとうの援助とは　芦谷美鈴　25
現地から望むこと　城内治美　28
被災状況緊急FAX　堀越由美子　33
被災の町に立って　斎藤千代　40
阪神大震災と女性記者　竹村登茂子　86

AGORAZEIN

阪神大震災とわたし
桑原ちゑ子　黒岩佐和子　斎藤千代　しまようこ
竹崎周子　田村伴子　寺崎しげ代　山本真美子　65

TOPICS　未組織女性の労組誕生　ほか　85
あごらめいと　アンデスのフェミニズムに燃える　サンディ・サカモトさん　88
ペルーの女は立ち上がった　10　第四章　農業改革と村の女・山の女(2)
キャロル・アンドレアス／訳　サンディ・サカモト　102

連載

看護婦・光と影　22　後藤登茂子さん(3)　増田れい子　92

****

足もとから揺れた

[大阪から]

危機管理の第一歩は危機を危機と確認すること

山際美代子

ギッシ、ギッシという揺れと音で目が覚めました。「ふとんかぶれ、頭から」夫が叫び、それから数十秒が過ぎました。すごい地震やったとは思いましたが、その時はまだ惨禍がこれほどまで大きいとは想像もしませんでした。ラジオやテレビが強い地震のあったことを伝え、JR、阪急、阪神など交通機関がストップしていることを報道し始めたころ、「あ、今日は会社へ行かれへん、四連休になるワ」不謹慎ですが、しめた！と思ったこと正直に告白します。

わが家は大阪北部千里丘陵の片隅にあります。たまたま大きな難は免れたんですが、被災地とは目と鼻の先、数キロメートル西へ行けばそこは豊中市、池田市、伊丹市、川西市、宝塚市

と連なっています。そのとき被災地では、一瞬にしてガレキと化した建物の下で、多くの人がうめいていたりしていたのに、そのことを私が確実に知ったのは、地震発生から数時間以上も経ってからでした。

その日は一日、テレビにかじり付いてました。阪神間に住んでる親戚や友人・知人に電話しましたけど通じません。「ただ今混雑しております。しばらくご遠慮ください」というような意味の奇妙な電話局の応答が空しく返ってくるだけでした。

刻々と伝えられる火災報道ではいらだちました。燃えていく地区の地名がわかれへんのです。レポーターは燃えてる状況ばかりしゃべって大騒ぎしてる。こちらは、長田と聞いてもあちこちに友人や知人が住んでます。よく通ったおいしい焼き肉屋もありますから、詳しい場所が知りたい。延焼していく場所を空撮してくれるのはええんですが、せめてその辺りの地番、地図を示してほしい。土砂崩れの仁川でも、仁川のどこなんかを知りたい、たいていの人はそう感じたと思います。

テレビ報道に関してはもう一つ、震源地の淡路島は当然、神戸、芦屋、西宮、宝塚の被害は大々的に伝えられたんですが、マイナーな被災地、大阪府下や市内西地区の被災状態も、相応に伝えてほしかったたと思いました。救援活動が遅れたことを、後で知りました。

翌日は一部の電車が動き始めたので、出勤しました。勤務先でも五十人近い阪神間の居住者がいます。すでに仲間の惨状を知った同僚がいち早く休暇をとって救援にかけつけるというので、女性たちが手分けしてミネラルウォーターや濡れティッシュ、ドライシャンプー、生理用品なんかを買い集め、野菜も不足してるやろうというのでトマトは洗って、ほうれん草はゆで

て、気のつく人はお惣菜を作ってきたりして運んでもろてました。家で余ってる毛布や下着類を持ち寄っておくろうと呼びかけたのも女性たちでした。
住んでいたマンションが崩壊してしもた小学校時代の同窓生は、現地のすさまじい状況に、学童疎開から帰って来て見た五十年前の大阪駅の光景と重ね合わせたと言ってきました。失った物は多いけれど、戦争を知らない世代のボランティア活動には本当に感激したとも言うています。
――それにしても、当日の朝、事態の容易ならざることに、なんでもっと早う気が付けへんかったんかと痛切に感じてます。危機管理の第一歩は、危機を危機！と認識することにあるんですから。

阪神大地震を身近で体験して

山田　和枝

私は寝屋川に住んでますが、そこでさえ、地鳴りとともに今まで経験したことのない激しい揺れを感じました。築三十年以上のわが家は塀が倒れ、壁にひびが入りました。近所では古い文化住宅や家に被害が出たようです。

＊＊

私の恩師は東灘区のマンションの一階に住んではったんですが、その一階部分がわずか一メートル足らずに押しつぶされてしまいました。「家あったんが不思議なくらい」と言われてます。研究資料やアルバムなどお金では買えないかけがえのないものすべてを失ってしまわれました。

私は今まで日本ではボランティア精神は育てへんとなんとなく思てました。けど今回のことで「見捨てたもんではないな」と思いました。〈アレルギーを考える会〉はアレルギー用粉ミルクを持って全員が神戸へ出かけました。〈ヨガの会〉は新年会の費用をカンパしました。診療所のナースたちは医薬品をもって駆けつけましたし、私のつれあいの会社では企業ぐるみですから純粋にボランティアといえないまでも、防水シートや水のタンクをもって神戸へ行っています。身近なところを見渡しただけでも、本当に多くの人がボランティア活動に参加してまして、見直したというところです。

今度の地震で感じたことの一つは行政の対応の遅さでしょうか。サンフランシスコ地震のときの対応の早さは常に戦時体制がアメリカではしかれているからやとか。純粋に災害対策ができる（人命を本当に大切にする）世の中を願わずにはおれません。その人命も軽さ重さがあるんでしょうか。テレビのおかげで、あまりにも多くの命が目の前で犠牲になっていくのを見ました。活断層直下にあった家は、新築・マンション・古い家、ほぼ区別なく倒れましたが、焼けた地区はいわば下町、靴ヘップ加工のシンナーもあって火災も発生しやすかったんかと心が痛みました。

これからが大変！ 損保業務

澤田 和子

私もあの日はドスン、グラグラという音と激しい揺れで目が覚めました。ふとんの上に座ったものの、どうすることもでけません。「地震や、家潰れる！」と思いました。わが家は淀川べりの十二階建ての巨大マンション、その九階に住んでますからよけい大きく揺れたんやと思います。停電になって、障子開けましたけど外はまだ暗い。仏壇にあったローソクに火つけて、やっと家の中見えるようになりました。ありがたいことに家具の倒壊はなく、棚や本棚の上のものが落ちたんと、台所の油、しょうゆ、酢、小麦粉なんかがグラスの割れた破片と混ざって散らかってる程度でした。同じ建物の中でも家具が倒れてケガをしたところも数軒ありました。一時間ほどすると電気がついたんでテレビ見ましたけど、テレビ局内の揺れ写した映像だけで、大災害になってるとは予想しませんでした。

私は損害保険の代理店やってますので、阪神間にたくさんのお客さんいてはるんです。それですぐに会社へ出て、顧客名簿から被災地のお客さんのリスト出して事故の対応に備えました。けど電話がなかなか掛かれへんし、頼みの保険会社も社員が出社してきてへん状態で、一日中いらいらしてました。

＊＊

翌日からは営業で外へ出るのはやめて、電話で事故の処置・相談に追われてました。私が今せなあかんことは、契約者のために頑張ることやと思いましたから、友人の安否を確かめることもせず、終日電話の応答に追われてました。

日が経つうちに、保険の支払いについてのまちがえた報道があったり、うちが委託契約してる損害保険五社の対応がまちまちやったりしてほんとに困りました。生命保険とは違うて損害保険は全商品が統一料金で、保険金の支払いは統一されているはずなんですけど、各社がばらばらに新聞広告しはじめたんで、こんな大災害のときには協会で保険金の支払いや払い込み猶予なんかについて統一した広告出すようにしたら、トラブルやデマも減るのにと思いました。担当者にそのこと申し入れたりしたんですけど効果ありませんでした。今後は保険金の支払いめぐっていろいろトラブル予測されます。私自身たいへんな仕事してるんやと実感してます。

お客さんの安否尋ねて芦屋と長田に足運びました。テレビの映像で見るのと違うて、この目で見える光景は「悲惨」「むごい」という言葉では表せません。見物気分でカメラ持って被災地に来る人たくさんいるそうですが「それでもええから、一人でも多くの人にこの惨事見てほしい」と被災地の人は語っておられました。

被災地への援助は、三日後に大阪市立婦人会館の学習仲間と生理用品を大量に買い込んでおくりました。友人たちもそれぞれの立場からボランティア活動に参加されてますが、私は時間がないのでカンパだけさせてもろてます。

「いま私らに何ができるか」息の長い支援が必要でしょう。

ボランティア活動に参加して

吉田　悠子

阪神大震災の被災地へボランティアで参加してきました。

これは昨年度、ポーランドのアウシュビッツ収容所へ、留学中の息子と半日歩き回ったこと、初めて一人で帰国してきた体験が、私の中で少しずつ何かが育ってくれているように思い、私なりの思想を持ちたいと自主的に活動に参加したんです。

第一回目は一月二十七日、市役所の救援班の腕輪をつけて、西宮市今津小学校体育館で物資の仕分けをする仕事です。七十名です。医療技術のある看護婦や保健婦は能力をいかして避難現場へ入りましたが、一般人は給水や物資の荷おろし、分類する班などに分かれました。給水班にまわった人は、一日中腰かがめて作業してしんどかったらしいです。私は物資を仕分けする仕事ですが、一日八回、大型トラックや郵便局の車で運ばれてくる救援物資を降ろして、全員がじゅずつなぎになってリレーで体育館へ運び込み、そこで仕分けするんです。水、医療品、カイロ、衣類いうても男物、女物、おとな用、子ども用、赤ちゃん用、防寒着、肌着、くつ下とさまざまですし、毛布やタオル、オムツ、生理用品、食糧は缶づめや、果物なんかは衣類の間に入ってたりして腐りかけてるのもあったりしてそれはもうものすごい量です。避難所によ

っては全然届けへんかったりしたところもあったらしいですけど、私らはあそこで、これだけの量いつになったら片付くんやろうと気が遠くなるほどでした。これだけ集まってくるなんて、日本も捨てたもんではないナと思ったりしました。仕分けするのに手先は冷たかったし、寒かったし、後二、三日は足腰も痛かったんですけど、自分で希望してやったことやし、納得はしてるんですけど、あくる日職場へ出たとき、上司から何のねぎらいの言葉もなかったのはちょっとがっかりでした。

二回目は二月十八日、ちょうど地震後一か月経った芦屋へ入り、広報紙配る仕事です。午前中に北の地域を歩いて回りました。寺の屋根が重さに耐えられずひしゃげていましたし、古い木造の家は軒並みやられてましたし、道路は亀裂が入っていて、改めて怖ろしさを感じました。午後は南の海岸地域。この辺りは松林が多くあり、埋め立て地に建てられていた一戸建ての新興住宅や大きなノッポマンションには被害はなかったみたいです。活断層の通っている北側がやられたのだという実感を、広報紙配りに町中を歩き回って知りました。芦屋市役所の通用門から通り抜けようとしたとき守衛さんに呼びとめられたのがきっかけで、お話を聞いたのですが、心にこびりついています。守衛さんの友人で、入院中の家族の話です。家の梁の下敷きになって七時間半後助け出されたのですが、手術せんならん大けがやそうなんですが、その方の娘さんは、梁の下敷きになったまま、迫ってくる火の中、「私はもういいからお父さん行って、危ないから」と生きながらに助け出されずに亡くなりはったというんです。娘さんと握り合っていた手のぬくもりがどうしようもなく忘れられへん、生き地獄やったということを聞きました。

地震は天災やけど、私も公務員のはしくれ、こんな経験を教訓として生かさへんかったら人災やと思います。テレビで被災地の様子見てて、なんかじっとしてられへんかった気持ち、私でもできることせなあかんと思てましたから、たったの二回でしたけど、ボランティア活動の中から学ばせてもらいました。

姿の見えない被災者ーアジアの女たちに思いを馳せて

サンディ・サカモト

初めて〈あごら大阪〉のみなさんにお会いできてとてもうれしかったです。皆さんとてもさわやかで意欲的な方々ですね。斎藤さんもお忙しいスケジュールを一日延ばして神戸へ行かれたとか、被災者の方々に対する皆さんの熱い思いが感じられました。

私はあのあと一月三十一日、阪神電車で青木まで行ってきました。友人と行くことになってたんですが、梅田で混雑のためにはぐれてしまい、結局別々に荷物をもって行くはめになりました。電車から見てると、尼崎まではたいした被害はないように思ったんですが、甲子園あたりまで来ると、青いビニールを屋根にかけてある家や、何十センチもずれた橋桁や百メートルにもわたってひびの入った道路が見えてきました。西宮では古い家でちゃんと立っている家はないというてええくらい潰れてるものが多かったです。大きいコンクリートのビルも傾いてる

し、町は見るもあわれ。青木の駅から歩き始めると、メチャメチャにこわれた家々、とそこへ後ろからカーキ色のジープが細い路地へ入ってきます。自衛隊です。こわれた民家の間を自衛隊の車がわがもの顔で走ってる。まるで戦場や！　と思いゾッとしました。古い木造のほとんどが潰れ、モルタルの家も半壊になったり、ひどいひび割れ、とても人が住めそうにありません。「私たちは無事でした。○○にいます」という貼り紙がしてあるのを見ると、ああよかった、ここの人たちは生きてたんや！　と、見知らぬ人ながらほっとする瞬間もあります。

こんな戦場のような状況は生まれて初めて経験するんですが、そこにはもう一つの私がいました。それは自分の生死を意外にも実感できないでいる私。電車の中から見た模様にショックを受けたのに、実際に目の前で見ると、それはゴーストタウンのモデルみたいに思えてくるから不思議。おそらく普通のショック以上の体験やったからかもしれません。いつ大きな余震が起きないともしれない被災地のまっただ中を歩きながら、モルタルが今にも落ちてきそうな道を通っても、意外にみんなクールなんです。冗談を言い合いながら歩いている人もいるし、いつもとあんまり変わりがないような態度なんですね。このころには最低限必要なものも着いたり、店も開いてるところがあったりして、一応落ち着いたからなのかどうか不思議な気がしました。

そんなこと考えながら歩いてると、歩道橋の上にたくさん人が集まって下を見ています。私も何かと思って階段を上がっていくと、ホームレスらしい男の人がオートバイにぶつけられ頭から血を吹き出して倒れ、ときどき足をけいれんしたようにピクッピクッと動かしています。警察官が来て事故の様子を見、また救急車が来て、男の人をタンカに載せ車の中に入れたんで

すが、なかなか病院に向かわない。ホームレスやからというて病院で拒否されたりしないといいけど、被災者としては扱われず後回しにされないといいけど、ホームレスやからという理由でろくな治療もしてもらわれへんかったりせんとええけど……などと考えながら、私も足をすくわれたかたちになりました。被災地で起こった交通事故、犠牲者はホームレスの男性。命は助かったんかどうか見当もつきませんが。被災者もホームレスになったのに。天災によるホームレスと一般のホームレスとの扱われ方の違い、被災地の中で食物も配られることのない人たちがいる。私はやりきれないものを感じながら歩きました。

連日テレビで被災者の生活が報道されていますが、その中に何万人もの忘れられた人々が存在しています。地震後一週間ぐらいは日本人被災者を集中的に報道するスクリーンを眺めながら、神戸に大勢住んでる在日や海外の人々はどうなったんやろうかとぼんやり考えてました。

しばらくして、日本人以外の人々も登場してきました。それはお互いに助け合っている朝鮮、韓国の人々、朝鮮学校で助けられている日本人の姿でした。その日本人はそれまで朝鮮学校の人とは話をしたこともない人たちでした。とても感動的な出来事やと思います。

一般に外国人というても、日本に来る理由も条件もさまざまです。語学を教えに来てる欧米諸国の人々、留学生、就学生、研修生、出稼ぎ労働者など、日常生活も違いますが、地震などの非常事態下では、状況も天と地ほど違ってくるのではないでしょうか。だまされて連れてこられバーやナイトクラブで働かされていたタイやフィリピンなどのアジアの女性たちが生き埋めになったとき、雇用者は助け出すやろうか、運悪く死んでしもたりしても、それを公表するやろか？　もちろん答えはノーでしょう。だとすると、まるで動物か何かのように性奴隷とし

て狭い部屋につめこまれカギをかけられていた女性たちは今もあのガレキの下敷きになったままなのかもしれない。それら女性たちだけでなく、工場や店や建設現場で働いていた男性や女性も同じでしょう。その人たちは合法的には存在しないまま無縁仏になってるかもしれません。運よく生きてたとしても、市役所や学校など公的な援助機関に助けを求めに行くことはでけへんかったはずや。職も家も失い、途方にくれてることやと思います。市民グループでそんな海外の人たちに情報を流したり、援助をしはじめている人たちも出てきてますが、マスメディアでは彼らのことについてはほとんど流してないのが現状ですね。地震被災者の問題は、まだはじまったばっかりという気がしています。しかし、海外から来て、日本で働き住んでいた被災者の問題は、まだはじまってもいないのかもしれません。

[激震地から]

車はつぶれましたが……

駒尺　喜美

日頃はご無沙汰しています。昨年は親しい人を相次いで亡くしたこともあり、年賀状も欠礼しました。年明けと同時に大地震に襲われ、この辺りも大変な事でした。食器などあらかたダメになり、大きいものではテレビ一台、車一輌が全壊しました。当時は異常に興奮していまし

たが、やっと日常の気分が戻ってきました。地震が怖くて東京を逃げたのに凄まじい経験をしました。ザマアミロというところです。まだ神戸方面へのお手伝いなど身辺さわがしくしておりますので、簡単なご報告とさせていただきます。

（吹田市）

人のやさしさが見えるようになりました

西田冬至子

このたびはお葉書、本当にありがとうございました。幸い三田はほとんど被害はありませんでしたが、私の実家は神戸で、友人・知人が多く住んでおり、つらいことですが、彼女たちの多くが家を失い（全壊や焼失）、避難所や親戚宅で暮らしています。六年前住んでいた芦屋の社宅近くは、ほとんどの家が壊れています。「何がほしい？」と聞くと皆「お風呂」と言います。ガスと水が出るには、まだ二、三週間かかるでしょう。「いつでもお風呂、入りに来てよ」と言っていますが、私も遅ればせながら、風邪も治ったので、手の足りない避難所で、ボランティアのお手伝いをしなくてはと思っています。先日、会社を休んでボランティアをしている東京から来てくれた青年の活動ぶりをテレビで見て、本当に手をあわせたい気持ちでした。不自由な被災生活をしている人にとって温かい栄養のある食物、野菜や果物が必要のようです。避難所によって食事や配給内容に差があるのも事実です。人数（十人〜千人）や、自衛隊のサポ

ートのあるなし、設備の違いに加え、避難所は千以上あるというのですから。
私は西宮で英語を教えていましたが、教室のあるマンションが半壊。子どももまだ連絡がとれなかったり、一時転校や避難生活をしている子がいて、休校中です。子どもたちは大人以上につらくて、悲しくて、じっとがまんしていることも多いかもしれません。阪神間の人たちは、震災後、本当に大切なもの――家族の絆や、人を思いやる気持ち、温かく、手をさしのべてくれる人の存在を痛いくらいに感じていると思います。被災した人、近しい人を亡くした人たちの苦しみ、悲しみはまだまだ続いていくでしょう。これからが大変と思いますが、皆が、希望をすてず、前向きな気持ちで支え合って、私の大好きな神戸とその周辺の町が、これまで以上に素敵な街、住む人の心の美しい街に復興してくれるよう私なりに応援していきたいです。
あの烈震があった朝、すぐに電話して両親や友人の、ともかくも無事な声が聞けた時の安堵と感謝。テレビに映る信じられないような状況、連絡がとれない友人・知人がどうしているのかという心配、震災後、はじめて神戸の街を自分の目で見た時のショックと悲しみ――。〈あごら〉メイトの方も、元気にしておられるといいのですが。ガスや水が出るようになれば、避難先から戻ってこられるかもしれませんね。
なお、〈あごら〉の会費ですが、お心遣い心から嬉しく思います。ただ、私は物質面の被害はありませんでしたし、来年度も喜んで会費を払わせていただきます。
もう、何があっても、驚かない、本当の人の優しさが見えるようになった。想像もしていなかった現実に少なからず人生観も変わった気がします。悲しみを乗り越えて、皆さん、頑張ってほしいです。スタッフの皆さまも、おからだに気をつけて下さい。
（三田市）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

我が家は無事でした

藤原美和子

震災をご心配いただきありがとうございます。当方、家人、家屋とも何も被害なく無事です。ご安心下さい。

連絡用の葉書まで配慮いただき、細やかなお心遣い感謝いたしております。もっとも、私、親族、友人、知人が神戸に多く、いまだ安否わからぬ人がいて、心労の日々です。

以上、何の被害もないゆえに、次回の購読料は遠慮なく要求下さい。振り込みいたします。

（西脇市）

生きることの原点を振り返りました

高木由利子

年明け早々思いもよらぬ大地震。被害の大きさに今でも信じられぬ思いです。私の家はおかげ様で致命的な損傷にはいたらず、家族のみんな、けがもなく、無事ですのでご安心下さい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

地震の直後の混乱時には、五十年前の戦争で焼け出された当時を思い出しましたが、二週間余を過ぎた今、ガスや水道の復旧に全国各地からの救援隊がかけつけて下さり、日夜努力して下さっており、大勢の各種ボランティアの人たちの活躍等、本当に本当に有難いと思っております。何日も断水して不便な日常も、皆なかよく助け合ってがんばっています。やっと水が出てやれやれ。今度はガスが、待ち望まれます。生きるということの原点を振り返る意味で、人生観が変わった人も多いことでしょう。

（宝塚市）

◆兵庫県下だけでなく、駒尺さんのように大阪府内で被災された方も多いようです。澤田さんまで至急ご連絡下さい。集まっているカンパをお送りします。また今年度分の〈あごら〉の会費は、お返しします。

連絡先　大阪市東淀川区東淡路1＝5＝2＝443　澤田和子

TEL　06＝322＝2203　FAX　06＝320＝3413

◆次の方々のご消息がまだ不明です。ご存知の方、お知らせくださいませんか（敬称略）

神戸市灘区　重川美枝子／兵庫区　久保和子／須磨区　池田説子／芦屋市　浅野裕子　上田由美子／伊丹市　井上常子／西宮市　佐藤陽子／川西市　岡田芳子／美方郡温泉町　西村康子

◆全国の皆様に――この号の売上は、カンパに回します。どうぞ一部でも多くお買上げください。

女たちはすぐ立ち上がった

対応の遅い政府や自衛隊に比べて、全国の女たちの動きは早かった。女のネットワークが網の目のように張りめぐらされていることを、今度ほど感じたことはない。大阪の澤田さんは生理用品を二梱包、名古屋の高橋さんは日用品、高山の岡田さんは十トントラック二台で畳六百畳、自転車四十台などのほか、使い捨てカイロや飲用水を満載して送った。全国的な大組織の〈看護協会〉は三百人の看護婦さんを緊急派遣、〈日本婦人会議〉は蛍光染料の入らないショーツを一万枚、〈新婦人の会〉は現地で豚汁等の炊き出し、〈YWCA〉は死者一名を出しながら神戸支部を救援センターに開放など、刻々情報が入ってきた。〈あごら〉のメンバーで、現地のボランティア活動に入った人も多い。情報を耳にした時にはもう体が動いていた。いつも動き慣れている人びとの反射的な動き方だった。

地震と草の根ネットワーク

高橋ますみ

早朝の地震、名古屋でも、かなり長い時間のゆれを感じたが、一瞬にして五千人を超す方々の命が失われようとしているとは鈍感にも想像できなかった。

午前七時からのニュースで淡路島、神戸を中心にした阪神地方の大災害を知った。午前八時ごろ、大阪で学んでいる息子から、無事を知らせてきた。テレビではいく度も、関西へは電話をかけるなと呼びかけていたので、イライラしていたが、ひとまずホッとする。

「家具は倒れ、冷蔵庫は中に入っていたものを全部吐き

出しながら台所を歩きだした。直後に停電。食糧の確保が気になり、バイクでコンビニへ走ったが、レジが動かないとかで、何も手に入らない。飼いネコも腰が抜けて歩けない」と。

翌十八日には、私の営んでいる学習塾のネットワークから、阪神地方の同業の方々の消息を知らせるFAXが岡山の明修塾発信、愛知県岡崎市のみどり学院経由で入るようになった。全壊半壊続出。中には一億円ほどのローンを組んで、塾舎兼自宅を新築、披露パーティー一週間後というケースもあるという。すぐ、歯ブラシ、石けん、シャンプーなどを小包みにする。ナイロビの女性会議がご縁で結成された孤児施設の援助ネットワーク〈少年ケニヤの友〉を通じて送るためにキープしておいた日常雑貨である。旅で泊まるホテルの洗面具は、使わないで持ち帰るようにしているから、かなりの量がたまる。塾生やその保護者へも募金のチラシを作って呼びかけた。

一月十九日、京都のフリーライター野寺夕子さんから、JR西宮北口近くの〈すくーる・すばる〉へ女性用下着を届けるようにと電話があった。「どこかメーカーにかけあって、多量に」という。メーカーには心当たりがない！　家電の販売会社の社長、毛織物会社の社長と、そのすじに知り合いのありそうな人に電話で打診。翌日には、すでに各工場とも在庫は出払っていてムリとの返事。私には、財界に知り合いがないのでこんなときにはなんともならない。私のネットワークの主力は懸命に生きる女たちである。これからは、ネットワークの方向をちょっと変えて拡げることも必要と痛感する。

障害児の親たちのネットワークで活躍する豊田市の伊神紀久子さんが、半額以下で下着が手に入る問屋が見つかったから、買い込んで、西宮へ届けると言ってくれた。野寺さんから毎日入るFAXの内容も日を追って必要なものが変わってきた。モノの流通路が確保されるにつれて、モノより現金が便利になってくるようだ。一週間後の一月二十四日は、ウイン女性企画の新年パーティーである。

〝思いっきりおしゃれパーティー〟と銘打っての恒例行事である。自己解放は自己表現から。五十代が娘の振り袖、四十代がボロボロジーンズや網タイツと、年齢を超えてしたい放題、とにかく自己拘束をとりはずす集いで、これを

楽しみに各地から駆けつけてくる。自粛するか否か。話し合って、予定通りに決行して、募金をし、野寺夕子さん経由で〈すくーる・すばる〉へ届けることにした。

高山の岡田芳子さんからも、その地方のあらゆるネットワークを駆使して、地震三日後には、十トントラック二台に満載して送り出したと電話が入った。JR各駅の忘れ物カサも手に入れたといっていた。

すばやい対応も大切だが、息長く継続することが必要だろう。私たち草の根ネットワークは、ことがあるたびに、いく重にも重なり、密になり、境界線もなく地球規模で拡がっていく。

（2月17日）

やりたいことがほんとうにできるネットワーク

岡田　芳子

兵庫県南部地震から二日後の十九日（木）の夕方、私たちのPANTS事務局に電話が入りました。内容は「明日三時、救援物資輸送トラックが商業卸センター前から出るので、物資の支援協力をお願いします」というものでした。この情報は個人のネットワークを通じて人から人へ伝えられ、高山青年会議所のメンバー一一二件へ送られたFAX情報や、保育園の連絡網などを活用して、一夜のうちに多くの方に伝えられることになりました。

現地との密な連絡の取り合いで、要望のあった物資の数々がわずか一日半で十トントラックに満載されて、二十日と二十一日それぞれ一台ずつ、合計二台無事に輸送することができました。道路の渋滞や人手不足など被災地は混乱を極めており、荷物が放置されたまま手がつけられないという状況下、いち早く皆様からの善意を届けることができ、いまだに信じられないような気持ちです。いろいろな方たちの力と善意がみごとに機能し「必要な物資に限定したものを」というかたちで送る手だてが与えられたことは、本当にありがたいことでした。

一台目のトラックは谷口さん（谷口運送）自らが乗り込み、決死の覚悟で出発（二十日午後三時）。二台目のトラックは、物資のかわりにいただいたお金で運送便をチャー

ターしました。チャーター代にはお年玉も含まれており、子どもたちの気持ちもすぐに救援活動の大きな力になりました。受入れ先の本山第二小学校・西灘小学校では田之下さん（徳重屋）の仲間たち（神戸在住）が対応にあたり、不通になっている電話の代わりにバイクやポケットベルでつなぎ、車の誘導など常時情報が確保されていました。また、荷物の受入れも到着時刻の情報を事前に流すことが可能だったため、甲南大学・神戸商業高校の学生のボランティアや本山第二小学校の先生方が早朝三時に待機することで荷物は確実に届きました。

情報を流してから物資が集まり、箱詰めから積み込みまで、まる一日たらずの対応ができたということになります。二十日（金）朝七時過ぎ、「飛騨高山から仮設トイレが届きました」と報道されているテレビをご覧になった方もあると思います。二十一日（土）の物資も、すぐに必要と連絡のあった品目にしぼり、傘二千本、地元では一～二台しか手配してもらえなかった自転車を四十台分、畳六百枚、ストーブ二十台などの配送に、西灘小のよろこびはひとしおで、くれぐれも皆さんにお礼をとのことでした。（中略）

二十日、二十一日の対応関係、およその内容は次の通りです。ご協力いただいた方々にお伝えいただければ大変ありがたく存じます。

二十日（金）十トントラック一台。

物資の内容…水、衛生用品、女性用下着、紙おむつ、使い捨てカイロ、ポータブルコンロ、ボンベ、カップラーメン、味付き缶詰、缶切り。

二十一日（土）十トントラック一台。

物資の内容…水、畳（約六百枚）、自転車（約四十台）、傘（約二千本）、ストーブ（二十台）、他。

その後も田之下さんを中心に救援活動は続いており、動きも内容も参加している方々の顔ぶれも、刻々と変わってきています。あまりの情報の多さと変化に整理がつかないまま、戸惑うばかりで十分お伝えできません。とりあえず活動の動きだした部分、それも、およそしかお伝えできないことをご容赦ください。今後、何らかのかたちでできる限りお伝えしたいと思います。

＊

以上は物資輸送にご協力下さった方々へのお礼状の一部です。高山からまさか十トントラック二台分もの緊急輸送ができるとは、私自身、思ってもみなかったことでした。私たちはいただいた情報を流しあったこと、そして、自分たちのできるささやかなお手伝いをしたにすぎませんが、大きな組織やいろいろな立場の男性も関わって下さったことでほんとうに信じられないような活動になりました。真っ先に情報をいただけたことも、八年目のネットワーク活動へひとつの評価をいただいたことではなかったかと思います。

誰もがお互いの傘下へ入りたくないのが心情で、地域の活動も組織同士のボーダーレスは難しく、お互いいい活動をしていながら共有できないところを感じておりました。地域の婦人会組織にも興味が持てなかったので、個が主体になれる、個が尊重される有機的な動きを求めて試行錯誤を重ねてきました。

はじめの三、四年は、種を蒔き、水をやるネットワークとしてとにかく大小さまざまの（個人・グループを問わず）きっかけを種として広げる活動、それぞれの活動は、主体性を持って展開するその動きをサポートする場としての拠点づくりをしてきました。

そして最近の二年ほどは、やりたいことができるネットワークの段階へ入って来ていることを感じていた矢先、本当に身の丈以上のやりたいことができてしまったということになりました。ネットワーク作りの八年の間には不毛の地を耕しているようなときもありましたが、今ようやくボーダーレスできてきたかの実感と有機的な動きの感触を感じています。

ちなみにＰＡＮＴＳの文字には次のような意味をたくしています。

P (Personality) 個を大切に
A (Amusement) 楽しみながら
N (Natural) いろいろのことを
T (Transmit) リアルに本音で伝えあい
S (Service) お互いサポートしながら

ほんとうの援助とは

芦谷　美鈴

地震のこと

●十七日早朝の地震以来、関西の知り合いや友人たちから次々に無事情報が届いた。ニュースクール講座の参加者をはじめ、安否の問い合わせがあった人への連絡をして、「どんな援助をしたらいいのか」の連絡を待っていた。こちらからやみくもに連絡をしたり、勝手に物資を送っては迷惑になることもあると思ったから、ひたすら現地の人の要請を待っていた。石井布紀子さん（すくーるすばる主宰／西宮）は無事で、塾と自宅が他の人の避難所になっているからカンパが欲しいと伊藤美恵さん（ワークハウスぽろろん主宰／京都）を通じて連絡があった。有馬さん（らくだ九州主宰／福岡）と相談し、即刻らくだネットワークに、救援依頼のファックスを流す。私の教室ではカンパ箱を設置。早速子どもたちが小遣いを入れてくれる。子どもの中には十五、十六日の連休に関西に出掛けていて、危機一髪の子どももあった。

「私たちのところに噴き出す地震が、代わりに関西に噴き出したのかもしれない。地震は地球上のどこでおこるか確率の問題。私の代わりにあなたがそれを背負ってくれている。そんなあなたに感謝を込めてできる支援をしたい」ハンド&ハンドの援助をさせてくれた石井さんと伊藤さんに感謝。

●「ボランティアの人が欲しい」と伊藤さんからのコール。早速、朝日新聞社大阪本社へ連絡した。ＣＬＣＡ（子ども生活文化協会／小田原）事務局の加藤さんに電話をすると、「関西にいる友人に声もかけているが自分たちが行けるように段取りをしている」とのこと。数時間後には平井さん（セルフラーニング研究所）から「和田さん（はじめ塾／小田原）は、こんな時こそ勉強だから、みんなで支援に行くと言ってたよ。もう六十万円集めたって」と電話。こんな時こそ、人が見える。この話を教室でしていると、子どもたちが「みんなでボランティアに行こう」と言う。車の

手配が始まった。（1月20日）

救援への動き

●西宮の石井さんからのコールに応えるため、中高生の子たちとマイクロバスで応援に行こうと、その準備に動く。西宮に詳しい運転手（住んでいた人）を探して募っている最中に、今度は「人はいらない」との連絡。状況は刻々と変化して、欲しい物資も、瞬時に変化するのがよくわかる。「さっきまではなかったけど、マスコミから流れた途端にもう余っていて、今はいらないという感じよ」との石井さんや伊藤さんの話が本当に実感として伝わってくる。「一度に大勢の人が来るより、長期滞在できて、ボランティアの訓練のできている人。他のボランティアに指示が出せるような人が欲しい。よく働ける人が欲しい。そして、車付きで欲しい」とのコール。烏合の衆のようなボランティアの対応に困っている様子が伝わる。みんなに電話連絡をして、該当者を探す。ボランティアに慣れているKさん（尼崎に居住経験あり）に一週間行ってもらえることになった。離乳食・ビニールシート・米・卓上ガスのボンベ・ウエットティッシュ・水・薬・ナプキン・紙おむつ・毛布・缶詰・ラーメン・バンドエイド・トイレットペーパー、そしてお金などが集まり、バンに満杯にして午後七時半に送り出すことができた。今日一日これにかかっていた。やっと送り出せてほっとした。ネットワークに感謝した。

　こんな時は本当に人が見える。有無を言わず、いるものをメモして出せるだけ出す人、「なんでもっと早く言わないの？」とお願いするこちらを責める人。「だって、今このコールはきたのよ」と欲しいものが瞬時に変化するのをいちいち説明しなければならない人がある。そういう一言がどれだけこちらの手を取っているのかわからない。質のいい人を送って欲しいとの現地からの言葉の意味が本当によくわかる。（1月21日）

●西宮の石井さんたちは、被災者が本当は何を望んでいるのかを徹底して掘り起こすために、ボランティアの人たちをインタビュアーとして送りこんだ。そこから生の声を集め、本当に欲しいものを確実にその人のもとに届けること

から活動を始めた。外から（被災地以外）見て、これが欲しいだろうとの善意の支援ではなく、本当に欲しいものだけを欲しい人に届けることをやろうとした。だから、石井さんたちから来る「欲しいものリスト」は細やかだった。「アトピーの子ども用の下着」「添加物だらけの腐らないインスタント食品」「風呂に入れない人用に入浴代用剤があるというから調べて」と、丁寧な指示がくる。「人を送るよ」と言えば、「質のいい、ボランティアに長けた人がいいよ」と言う……。まさに、支援するこちら側に「ちょっとしたことで、自分の善人性を満たすような支援はするなよ」と突きつけてくるかのようだった。「欲しいのは、本当に欲しいものだけ。余分な善意だけの役に立たないものはいらないよ」と教えられた。

この石井さんたちとのやりとりで、私は子どもの教育とも通じる同じ過ちを知った。子どものためによかれと思い、余分な邪魔ばかりをしてしまう私たち大人。援助のつもりが、気がついたら子どもの邪魔をしてしまっている。そんな教育の世界での過ちを日々自覚しているからこそ、石井さんは、私に究極の支援を突きつけたのだ。これが私は心地よかった。いらないものをもらってお礼を言うような、似而非コミュニケーションは私はいらない。自分の持ち場で徹底して、瞬時瞬時にいるものだけを要求できる能力、これが、子どもにかかわる時のポイントだ。百のいろんな援助があるなかで、そのときその子に必要な援助は、的確なたったの一つなのだから。

石井さんたちは、遅れている行政に文句を言うのではなく、その場で自分にできる全てのノウハウを駆使して、被災地の人々を繋いだ。被災地同士のネット、情報網としていち早く動いた。

そんな動きができたのは、どんなときも自分が育つチャンスと、マイナスをプラスに転換する装置を持っているからに他ならない。

さて、その装置とは一体何だろう……？

被災地の人たちを繋ぐ一役をかった石井布紀子をぜひ講師としてあなたの地域でお呼びください。支援とは何か？ボランティアとは何か？だけに止まらず、幅広いお話が聞けること請け合いです。

（2月17日）

現地に急行して

災害発生と同時に、日頃からボランティア活動をしているNGOグループは、一斉に活動を開始、その状況がネットワークグループにFAXで刻々送られてきました。臨場感あふれる報告の一部を抜粋してお目にかけます。

現地から望むこと

城内　治美

一月十七日、阪神大震災が起こった。やっぱり、この日に。ロス地震の日であり、あの湾岸戦争突入の日でもある。天の采配としか考えられない。それも満月の日。そして一粒万倍の日でもあった。

日本が止めに入らねばいけなかったあの戦争に、一人一万円ずつの税金、百四十億ドルで人殺しに加担した日本人ひとりひとりに、生き方、考え方を問いかける天災のような気がする。ぐらっ！と来る前に、そして、起床時より少し早めの家庭で火を使っていない時間に、何と多くの人々が、天からの白い光を目撃していることか。

亡くなられた方々は本当にお気の毒だが、一粒万倍――これをきっかけに、生命を尊重し弱者を思いやる政治に変わり、世界がすべて良くなる日になってほしい。

当日、会議で四国に行っていた私は、とるものもとりあえず、一月二十一日、神戸に駆けつけた。

交通機関は西宮まで。家屋やビルの崩壊の激しさの割に、道路は、高速道路以外は、車がしっかり走れる程度で、交通網の遮断は電車のみ。大震災と言われるのに車とバイクはかなり自由に行き来していられるのも不思議だ。電車に代わる臨時のバスも出ていたが、私は歩くことにした。窓しめっぱなしで、暖房ムンムンのすしづめ車内で身動きできないバス

に乗って、渋滞の道を五時間かけて西宮北口から三宮までゆくのなら、太陽を浴びて青空と風に吹かれながら、汗をかき、しゃべりながら歩くほうが、どんなに、心の健康に良いことか……。

いつ、ぐらっ！と来ても大丈夫なように　身の回りの物をディパックにつめて、疲れたら道ばたに座って、おにぎりひとつと、ミネラルウォーターで一休み。一緒の方向に進む人と雑談しながらゆったりと周囲の景色を見ながらマイペースで、歩き出した。

日頃から連帯感のあった地域の方々の素早い行動により、がれきの中から隣人同士の遺体取り出し作業や炊き出しが始まっていた。

高度成長期に忘れかけていた原始生活方式は、日本が失ってしまったものを一気に取り戻すかのようだった。

関西はじめ全国から駆けつけたNGOボランティアの一人として、テントに入った。

今日から物資が入ったとのことで、その倉庫になるテントの中で、物資に囲まれた形で、眠った。

朝七時に起床。公園の水道がちょろちょろと出るため、前日の食事用のナベの汚れを洗う。

昨夜の十一時頃から、何台ものトラックが物資を積んであちこちから届く。朝、手伝いに来た人々と、次から次へと来る物資の整理。今日から毎朝十時半に、配給制にするとのことで、ベニヤ板に告知のポスター書きと、行政から来た物資のリスト作りを、手わけして、皆きびきびと動く。

スウェーデンから東大に来ている留学生のケネスは、皆から仕事をしっかりすると信頼されていた。

会社をやめてここに来たという埼玉の石井英夫さんは、長期滞在して、この場所でがんばることに決めていた。私も二月八日頃からここに腰を落ち着けることに決め、本部に今日から入る行政と共生するためのアシストをすることを約束する。

九時にはダンボール箱をしっかり抱えた被災者の列がどんどん長くなって来た。自分の必要な物をテント（三十畳ぐらいか）の中でさがして段ボール箱に入れて帰る。ボランティアの人々は十時半からの配給に間に合わせるため、朝食抜きで、トラックからの荷おろしと、整理に走り回る。重い荷物も多く、腰にかなりの負担。配給開始となり、人々が、テン

トの中に急ぎ足で流れこむ。我われ三人は昼からの長田区真陽小学校（千八百人収容）の焼きそばとお好み焼きの炊き出し手伝いのため、十一時半にテント村を出発。ベトナムのユンさんに希望のテントを渡してあげることができたことで、少しホッとする。

『週刊読売』の関さんは、「取材に来るなら記者の前に人間としてボランティアをしてから、その感性で（記者として大事な事を）仕事として生かして記事にしてほしい」との要望に素直に行動してくれた。物資の運び出し整理をしたり、寝袋、コッフェル持参で、電車と歩きの乗りつぎで現地まで私と同行し、真陽小学校でも聞き込みすることで、心のケアを被災者ひとりひとりとしているような仕事振りを示してくれた。マスコミぎらいだった私に、少しずつの信頼関係を生み出してくれていた。

関さんは、感じたままの記事を読者に届けるまでのステップで、上司の制約にどこまでがんばれるかが、これからの自分の仕事だと、張りつめた顔で別れを告げて、帰っていった。「他の取材のみで現地入りした記者とは、一味違った記事を楽しみにしている」と私が言ったことは、プレッシャーになったかもしれない。湾岸戦争の起こった日であり、またロス地震と同じ日の阪神大震災の意義とマスコミのあり方（特に『読売』ということについても私なりの苦言をしっかり言ったが、関さんは真剣に受け止めていた）等、もっとゆっくり話したい人であった。「本当に言いたい事を通す時は、会社をやめることを考えないといけないんだと、感じています」と言って帰って行ったのが印象に残っている。バイク隊の若者と同じように、ボランティアをしたことで、今までと少しでも違った生き方、考え方を経験してもらえた様子だった。この体験をこれからの人生に役立ててほしい。

炊き出しの車を待つ間、自衛隊の給水の手伝いをし、千八百人のモダン焼き（お好み焼きの一種）の準備に入る。被災者と話す中で、避難所で、物を与えられる生活に慣れてしまうと自立して生きる力が消えて、「いつまでもこのままで、楽だわね」になりそうで、こわいという人もいた。ひとりひとりが自立し、市民レベルで行政を動かし、市会議員を動かし、市長や中央を動かし、新しい神戸を再建してほしい。日本のモデルケースとして、（国際都市として）神戸市民の自立を妨害せずに、行政と共に時間をかけて、弱者の事をじっ

くり考えられる都市造りを手伝ってゆきたいと、ボランティアの一人として思う。この地震を通し、亡くなった方々の事を考える時、ひとりひとり、被災者の立場に立ち、自分のできる範囲で長い時間をかけて神戸再支援をしてゆくことが、その方々への供養のような気がする。以上とりあえずFAXします。

（1月31日）

一月三十一日長田区南駒栄（みなみこまえ）公園に入る。ベトナム人、在日朝鮮人と日本人と三国一体の被災者が、共同生活を始めたテント村。日赤の医療隊も入り、私たち、（真下さん、『週刊読売』の関さん）が入った日には、赤ちゃんが生まれたとの知らせも入り、さっそくベトナムの人々のテントを訪問する。生後六か月の女の子の赤ちゃんとお母さんが兄弟と一緒に、六人で一つのテントで暮らしていた。もう一つ、ゆったりした大きなテントがほしい。ミルクも赤ちゃんが雪印ネオミルクしか飲まないため、それがほしいと要望。さっそく、さがしに本部物資在庫調べに走る。行政からの地図を片手に歩く移動の時間は、最高のストレス発散の時間でもあった。

本部では被災者とボランティアと共同で、送り込まれる物資を整理、管理していた。ボランティアの人々も多方面からかけつけた人々で、テントで生活しながらの人、キリスト教関係の近くから参加した人等。

地震が起こって以来、何度かトラブルが起こり、昨日は出刃包丁で切りつけられたと本部役員の人が話してくれた。行政の目が届かない人々の集団が、時の経過と共に自立するために、もろもろの障害とトラブルを乗りこえて立ち上がろうとしている。自主的に手伝いに飛び込んで来る気力のあるボランティアの人々と共に、ここの人々の生活が始まっている。失業し、家を失い、頼る人々のないベトナムの人々の力になろうと私も心に決め、雪の降って来た公園のテントに荷物を運び、在庫整理と本部の今までの経過を聞く。大阪から豚汁の炊き出し隊が来ていておいしいにおいが公園中にただよう。お腹がすいているから、のどから手が出るほど食べたいが、避難者の食事が終わってから、余っていたら頂こう。

整理しているうちに空が紺色に染まり、寒い夜特有の澄んだ空に輝く群星が、山頂に登った時のようにはっきり見える。底冷えのする今夜のテントでの泊まりを二人で少々心配す

る。寝袋のみでは、とても無理とのことで、ダンボールを敷き、毛布を借り、寝袋の下に二枚、上に二枚かけて、あたたかく眠りについた。

テント暮らしの中、朝日の素晴らしさを公園のすべり台の頂上でながめたり、夕焼けの空に抱かれるように、一日の仕事につくとき、自然が御苦労様とねぎらってくれている感じがする。被災者の為に精一杯働くことが、自分の毎日をこんなに素晴らしいものにしてくれる。災害の中で現地の人々の立ち上がるすごいエネルギーと共に働ける喜びを与えられたことを心から感謝しながら神戸長田区で生活する私です。二月三日東京に帰り、体力と資金を調達し、再び二月八日頃、南駒栄公園テント村に入る予定にしています。（2月1日）

お願いがあります。次のようなこと、関係方面に働きかけて下さいませんか。

①全ての保険会社の皆様、是非ボランティア保険の加入手続きと、加入費負担を保険会社で。

②石油連盟の方々、ボランティアの車とバイクにボランティア・パスポートを。そしてガソリン代を無料にして下さい。

③神戸の復興は、まだまだ時間がかかります。長期的にお金と人の力が必要となります。今回ボランティアの本質が問われる時であることも忘れてはならないと思います。私たちボランティアは、支援金もなくポケットマネーで現地に入り、寝袋と持参の食料でがんばり、長期に入った時は、被災者の食料をわけて下さいとも言えず、資金調達に我が家に帰るというくり返しです。ボランティアの人々の力がこんなにも必要な時、その資金面援助と保障について、国は考えて下さい。

④ボランティア保険加入、毎日の生活費、せめて、リーダーたちに運営費を支給できるように心からお願いします。ボランティア支援金を、是非別枠で送って下さい。バイク隊のガソリン代とかボランティアの人々のテント、寝袋、栄養補給の為の食料とか、共同炊事場設置費とか、使い道はいろいろあります。避難所の方々のものを遠慮しながら使用させてもらう状態では、良いサポートは不可能です。行政の方々の指導の下では、少々無理が来ている所もあり、ボランティアのリーダーたちの能力があっても役に立てられないというストレスも考える時でもあるような気がします。

⑤行政の方々、どうぞ仕事人としてのプライドを捨てて、

ボランティアの先行隊の意見も取り入れて、共生してゆきませんか？　そして行政の資金も、自衛隊以上に役に立つボランティアにこそ渡すことを考えて下さい。営利でなく心（ハート）で動いている、ひとりひとりの人たちの行動を評価するのが、現場を知らないトップの方々だというのは、大変残念でたまりません。ローテーションを組み、政界の方々も人間としてボランティアに寝袋と自前食料、自費を持参して一週間ずつ入られると良いと思いますけど……。いつでも案内させて頂きます。心からお待ち申し上げます。トップの方々はあまりにも無知ですから……。

（2月5日）

FAX通信「緊急わりこみスペシャル」

セイクレッドラン日本事務局　堀越　由美子

〈緊急通信・NO．1〉

現地の様子は、新聞・テレビの報道よりはるかに深刻です。関西のNGOグループはじめ市民レベルで現地入りし、細部のケアを始めていますが、効果的な方法をとるため密なる連係作業に入っています。各地よりの緊急かつ継続的な応援を強く望みます。

☆状況ピックアップ

- 現地は非常に広域にわたっており、一部の地域では送りこまれたなまものが腐り始め、一部では物資不足の状況。
- おおよそ食料、水の供給はできたが、生活用品は欠如。市には物品は届いていても、末端まで配布の手がまわらない。
- トイレの問題は衛生上きわめて深刻。野糞状態多し。神戸市のトイレ全般担当者はたったの四人。簡易トイレが救援物資として届いても、設置する人手がない現実。
- ボランティアの多くは寝る場所もない。
- 自力で他所に移転できる人はすでに移動。地元から離れたくない人々も多く、自力で移動できない人も多し。
- 積み上がるゴミ問題。
- 老人、身障者のケア大幅に欠如。外国人も同様。
- 各種作業担当者の疲労。
- 炊き出しの不備。（人員、物資）
- 現地における必要品及び要望は、状況、条件によって一

刻一刻変化する。

●小回りが困難で、末端、細部まで手が回らない。

☆1月25日（水）

砂利運搬船（歌手・桑名正博さんの尽力により確保した船。大型海上輸送兼ボランティアの宿泊先として活用）の第一回目の出航（大阪・大正→神戸・須磨）。

☆お願い

●募金　どしどしお願いします。

●また、行政に、迅速な無駄のない血の通った緊急措置をするよう、働きかけて下さい。

大阪市長　ＦＡＸ０６－２２７－９８７１（国際交流課）

大阪府知事　ＦＡＸ０６－９４４－６６１６（国際室）

〈緊急通信・ＮＯ．２〉

（大阪も余震が続き、再び震度3のなかで作業しています）

☆関西の動き

関西ＮＧＯが精力的に活動。外国人や身障者の人たちに焦点を絞った援助などもされており、連係プレーをしています。

セイクレッドラン事務局は中継点のひとつとして、物資＝ボランティアの受付を行い、必要とされる人、物を必要としている人のところに直接届ける努力をしています。

☆今日の活動

今日第一回の船を大阪→神戸に向けて出向（桑名正博さんのグループとの共同戦線で）、神戸に停泊中。人海作戦で物資を届けると同時に、長期にわたるであろう救援活動のシミュレーションも目的です。

☆現地の状況

「物資はもういらない」「ボランティアは余っている」といわれていますが、老人、独り暮らしの人、子ども、病人などのケアが一刻も早く必要とされています。寝たきり老人の下の世話をするような人はいないのが現状です。

広域にわたる現場の状況も要望も刻々と変化。新たな火災が発生、夜警や防災係も緊急に求められています。行政及びボランティアリーダーの泊まりこんでのアシスタントも、緊急に求められています。物資を運搬するだけでなく、多種多様な連絡作業、聞き込み調査及び具体的な対策も必要です。

☆ひどくなる現地での現状

今後さらに被災者の方々の肉体的、精神的疲労がひどくなっていくと考えられます。地震発生直後は「生かす」「食べさせる」といった支援が行われてきました。しかし今被災地は第二段階です。想像をはるかに越える数々の問題が起こってくるでしょう。そのためのケアをどうしていくのか、具体的方法を手探りで探していくしかありません。

☆官民一体となっての協力を

一番大切なのは官民一体となって取り組むことだと思います。今こそ行政の上層部が決断を下し、自治体所有の宿泊施設などを開放するような方向でやってほしい。住民も行政の措置を待つだけでなく、一人ひとりが動いて自分たちの状況を正確に行政に伝えていくことが大切です。

☆私たちの取り組み

1月20日～23日　トラック一台、バン二台、バイク十二台
1月25日・朝　船一隻、バン二台、車一台、バイク十三台が現地へ。

●現地では、身体障害者、老人などの地震後の安否不明者の捜索。バイクによる物資の余っているところから足りないところへの移動。避難所での炊き出し。避難所の状況調査。現地での水のピストン輸送などを。大阪事務所では、緊急支援依頼の受付。全国への物資提供の呼びかけ。全国から集まる物資の現地への輸送。現地情報の全国のNGOへの発信。現状把握のための情報交換、などを行なっています。

☆お願い

●現地に入って働く人が必要です。全国からボランティアを募集します。

一　氏名、二　年齢、三　連絡先、四　いつから来れるか、五　どれくらい滞在可能か、六　何ができるか、七　車・バイク・トラックなどの所有の有無を書いたリストを、事務局までFAXか郵送、あるいはお電話下さい。

●募金――とにかくお金がいります。各所で募金活動を。
(使いみち――不足物資の購入、ガソリン代、通信費等)

●物資の提供も続けて下さい。

●各地・地元でのリアリティに近づく情報、宣伝活動。

●兵庫県近隣行政へ強いお願いを届けて下さい。

●「あせらず、息の長い支援を！」

☆1月29日(日)

大阪東心斎橋の寿司屋、神戸市長田区西神戸朝鮮初中級学

校で寿司五百人分を配付。このボランティア出前は「なぜマスコミは日本人のことばかり報道するのか？　外国人もたくさんいるはずだ」という疑問から実行されました。さらに「ぜひマスコミに対して平等に正しく報道するよう皆さん方に呼びかけて欲しい」とも。

〈緊急通信・NO．3〉

救援活動は第三段階に突入！

数々の問題点が各地で浮上……。

ボランティアの炊き出しを被災者の人たちが引き継ぐ避難所が出てきています。自活し始めている人々や、被災者どうしでネットワークを組むという力強い動きが出ている反面、未だ物資が届いていない場所もたくさんあるようです。その方たちへ物を届けることも重要ですが、問題は精神的ストレスの蓄積。そのための各種トラブルももち上がっている様子で、今後もっと増えることでしょう。

☆ボランティアに来ようと思う人々へ

●今後はかなり厳しい状態の中での活動だと思って下さい。

●現場の状況（人や事態）に冷静、適切な判断ができる人が望まれます。

●たとえ即席ボランティアでも最低限の知識、心得ごとをふまえてから現地入りする必要があります。

☆船は1月31日、一度帰阪。2月7日再び大阪から神戸へ出航。2月1日～2月6日船ぬきのバイク隊を構成。

☆お願い

●物資を送って下さる時。箱の表に何が入っているか必ず記入して下さい。「なまもの」の輸送はさらに配達ルートを確立させてからでないとできません。

●至急、テレホンカードを事務局まで送って！！

☆事務局より

●日々新しい支援グループとのネットワークが着々と誕生。今こそタテ・ヨコ・ナナメのつながりが重要。ピース・ボートとの連帯も決定。

●パソコンネット情報、各グループとの連絡などでFAXフル回転。もう一台FAXと電話が必要。ワープロも！

●アメリカ・インディアン運動のリーダー、デニス・バンクスが大阪市長と知事に「私たちもお手伝いをしたい。セイクレッドラン日本事務局とぜひ連絡をとって、協力して

支援活動を進めていってほしい」というメッセージを送付。

●現地での食糧はおにぎりやお弁当が中心。あたたかいものがとても喜ばれます。

〈通信・NO.6〉

今号から「緊急」という文字をはずします。

震災からはや一か月が経過。現地の状況も「緊急」という段階から変化のただ中にあるといえます。良くも悪くも生活の場になっており、緊急時に必要とした物資も行き渡り始めていますが、これはあくまでもアバウトの状況です。

一か月も経つと人間関係上あらゆる問題が生じてくるのも当然で、隠れていたことや過去から引き続いていること等々が改めて浮上してくるわけです。阪神大震災一連のことは、その意味でも現在の日本の象徴的な姿とも言えましょう。

☆そのような状況下、現地の中から力強い動きが立ち上がりました。神戸復興を考える市民の会〈そして神戸〉という新しいムーブメントです。

絶望、無気力、悲しみ、怒りの中で、自殺して借金返済をするしか家族が生き延びる方法はないと考える人が少なくない中、それを乗り越えて人生に希望を持ち、再起を宣言される姿は、混迷の中の光と言えます。食べさせてもらい援助してもらうだけの生活を続けるなら、いずれ死ぬ。自ら再起への努力をすることだとの実際的な提案です。自立の心を取り戻すことができなければたとえ外観が整備されても、神戸は「死んだ町」になり、人々が死んでしまう、と。

〈そして神戸〉からの生命の叫びを聞き届けてほしいと思います。その呼びかけ文をご紹介します。

＊被災住民の心からの提案

我々に命を吹き込んでください！

自活再起させてください！

明るく楽しく被災者が生活し、行政と連帯し復興努力する。行政だけの町ではありません。私たちの街です。血の通った行政と、住民が協調し、愛ある街造り復興を私たちは目的とします。

（1）自活し働き、新しい街造りに主体的に参加し、同時に個人としても再起する道を自らみつける努力、行動をする。

（2）全都市機能復旧が五年以上と想定される現在、被災者

の働く場を生み、雇用を促進し、地域住民と地元企業の流出を防止する。

(3)安定した職と収入が得られるよう働きかける。同時に安定した労働力を確保し、人件費の高騰を防止し、交通費・宿泊等諸経費の節約、企業の安定収入、不当利益防止、引いては復興資金の節約と有効運用をはかる。

(4)復興事業から生じる税金は地元公共団体に収められるよう立法化をはかる。被災者も雇用される事で納税できる。現在も将来的にも財政の安定をはかり、復興発展を企する。

(5)職業安定所と協力・連携する。五年間に限り被災者が運用する職業斡旋組織をつくり、迅速な対応をはかる。

(イ)少しでも早く働く必然性があるので、例外的短期的、超法規組織をつくる。

(ロ)被災者が交通上不便な現状を考えて、簡単迅速に求職活動ができるようにし、働く意欲を誘導し自活再起の道を作る。

(ハ)清掃・郵送等、「ボランティア」「全国からの援助者」の皆様の職務を少しでも引き継ぎ、臨時職員・社員・パート・アルバイトの採用をはかる。

(ニ)復興事業発注条件に被災者の雇用を義務づける立法化を即時はかり、雇用の場を捻出する。

(ホ)未経験者雇用による企業側能率低下のリスクを排除し、被災者雇用で自立再建を優先する温かい施策を実施する。行政事務が増えるリスクはあるが、即刻実施する。

(ヘ)各種保険等、諸手続は簡素化し迅速な対応を優先する。

(ト)妻も子も家族みんなが働く場が得られるようにし、自力で家を建てる志に協力する。

平成七年二月十三日

神戸復興を考える市民の会「そして神戸」

〒650　神戸市中央区栄町通4-3-5毎日新聞神戸ビル3階　NGO救援連絡会議内
TEL　078-362-5951、FAX　078-362-5957~5960

(代表の上野泰昭さんは、三十年間、レストランのオーナーでした。震災のあと残った店の食器を「店は消えるが、せめて食器だけは生き延びて」と無料配布されたのをきっかけに、再起復興の主力パワーになった方です。)

☆お願い

どうぞマスコミ報道のレベルではなく私たちの現実を理解し、私たちの生の声を聞き、現状を変革するための助力をください。外からの援助ではなく自立を促進するための協力が欲しいのです。そしてそのために「仕事をし、自立再起するための民間組織」の設立に賛同してください。みなさん一人ひとりの理解が行政を、国を動かす大きな力になるからです。

☆私たちグループの判断

●二回目の船出（2月7日~2月14日）で海上輸送は中止。

●当初の個別的な要請から、必要事項が大口になってきています。そうなると個人レベルでの調達は不可能なので、企業ぐるみ、行政あるいはそれらに準ずるレベルにつなげていき、役割を移行するしかありません。また〈そして神戸〉の動きを外側から応援し、現地から出る要請やSOSには、身の程知った上で応えていくつもりです。

●緊急救援活動から、心と心がつながり合う「はーとえいど」と名付けた文化活動に移りたいと思います。すでに大阪での第一回災害対策講演会を終了、これからの予定としては三月の東京講演、緊急出版やビデオなどがあります。

●数日前、遠慮がちに取り残されているお年寄りたちに大根を煮て届けたら、「こんな食事を家族皆でできる暮らしを取り戻そうね、と勇気が出た」と、返事が返ってきました。

ライダーたち、
そして、未来への船出に関わった
たくさんのボランティアたちに
栄光あれ！

桑名正博

〔極私的ルポ〕

被災の町に立って

斎藤千代

見れば疲れることはわかっていた。まがまがしい多くのものが心に住みつくことも——。行きたくなかった。

それでも、大阪まで行って、神戸に行かないわけにはいくまい。その旨を伝えると、「おやめなさい。まだ死なれては困ります」——澤田さんの返事はきびしかった。

大阪でも余震が続いている。倒れかけた建物の立ち並ぶ神戸になど行って、もしものことがあったら……。澤田さんの制止を押しきって行くのはためらわれた。私に残された時間の中で、しなければならないことが山ほどある。それを第一にすべきだろう。イラクとは違う。報道陣は押しかけている。

その夜、午前三時の深夜ニュース、東灘区の死亡者の中に、Fの名を見つけた。生まれたての『あごら』を支え続けた友人。眠れなかった。彼女の逝った神戸など見たくもない。神戸行きはきっぱりあきらめ、用意していたスニーカーやカメラをしまった。

一月二十八日、〈あごら大阪〉の集いに出てみると、澤田さんは呼びかけた。「斎藤さんのことだからきっと神戸に行きはるでしょう。私はお伴できないけど、どなたか……」

思いがけない発言だった。小出さん、吉田さん、サカモトさんなどが、「有給休暇をとって護衛します」と、力強いサポートの申し出。私の心はグラリと傾いた。

深夜、Fさんのダイヤルを回した。何度かけても通じなかった電話の向こうで、何と、おつれあいのGさんの声がした。

「えっ、ご無事で」

「目ェが覚めてみたら、東隣も西隣ものうなってましたが」

悠容迫らないGさんの、いつもの声だった。

「十七日から、一歩も外へは出とりません。人の不幸を見に行く気ィはありませんから」

一歩も出ずに二週間暮らせるのは、万事に準備のいいFさんの手ぎわだと、私は感心した。

「おばはんはもう寝とります」

膝がガクガクした。

テレビの画面でその名を見てから、私は、Fさんとの長い歳月を繰返し思い出していた。とるにたらない小さな出来事まで次から次に浮かんで、もっと心を尽くせばよかったと、後悔ばかりが心にあふれた。それが、無事だったのだ。

サポーターを名乗り出た方々に、同行をお断わりした。無事といってもどんな状況かわからない。彼女の知らない人を連れていくわけにはいかなかった。

神戸へ

どこかで緊張していたのだろう。翌朝五時前に目覚めた。明けやらぬ道を急いで青木行き阪神電鉄のシートに深く座った時、車内に満ち満ちたにんにくの香りにハッとした。

長田……。大震災の第一報は長田で始まった。その記憶と重なった。

神戸には、一九六九年阪神高速道路開通の取材以来、何度か取材に訪れていたが、中でも重く心に残っているのが、ある若い母の事件を訪ねたことだ。おしゃれな神戸も、海沿いには棟割り長屋が並び、市場にははだか電球がともっていた。

海沿いの町々を案内したFさんは、帰り道、六甲の山すそから、急坂の神戸の街を見下ろしてポツリと言った。

「神戸は、阪急から国鉄、国鉄から阪神と、下に行くほど貧しくなるのよ」

十七日、午前八時のテレビで、燃えさかる長田の家並みを見ながら、神の不公正を怒った。激震が走るなら、永田町の真下であってほしかったのに。選りに選って、神戸の、それも長田に——。

にんにくの臭いで呼びさまされた二十年前に連なる記憶は、しかし、「今」と直結するものではなかったようだ。電車が甲子園口に着くと、車内の半分近くを占めていた労務者風の男性たちはどっと降り、にんにくの香りも消えていた。

青木に近づくにつれて、一人降り、二人降りて、車窓の外の風景が見えるようになった。進めば進むほど、線路ぎわの倒壊家屋は増え、終点青木駅からは、テレビで目に焼きついた黒焦げの建物が一つ二つ海側に見えたが、山側の向こうには、六甲の山なみが柔らかに連なり、ところどころにごつた緑をまじえた薄茶色の山肌は、冬というよりは、かすかな春の気配をただよわせていた。

ひと駅折返した深江から、その山なみのほうへ、ゆっくり歩き始めた。

東灘区

駅を出てすぐ、斜めに倒れかかった建て札が目に入る。「だんじり復興募金」——この激震のあとで早くもだんじり再興の募金を始めたのかと驚いたのは、私の早とちりだった。文字の右肩に「戦災五十年」の五文字があった。ここは戦災の土地でもあったのだ。そして五十年間、だんじりを祭れない歳月があったのだった。

駅に連なるメインストリートなのに、道幅は古い記憶よりはずっと狭かった。狭い道に両側からガラスやコンクリートの破片が散乱していた。アーケードの柱が大きく折れ曲がり、店々はガクッと膝をついたように崩れていた。「夜行くのだけは、およしなさい」と言われたとおりだった。

もう十何年、訪ねていないFの家への道のりは遠い記憶。六甲を目指して登って行けば、その中腹で見つかるはずだった。

が、道を訪ねようにも人影がない。路面のアスファルトの無数の亀裂は黒く無表情で冷たい。建ち残っている商店もあるが、それは崩れかけた隣家をけなげに支えて、自らの身も危うい。激しく傾いている店ほど、造りが粗末だったことが、ひと皮剝けた表板の隙間からうかがえる。新装開店！チラシやミュージックでけばけばしくはやし立てたであろう店ほど、開店を急いだツケが回っている。駅前通りに店を出す、そのことだけで精いっぱいだった人びとだろう。戦災五十年の五文字が頭をかすめる。

商店街を過ぎると、住宅街が続く。爆撃の跡のような破壊が気まぐれにあちこちに見える。建ち残った家の間に、見事に壊滅した家がある。イラクの北部で南部で見た光景と同じ

だ。「空爆の跡」と写真のネームをつけても、誰も疑わないだろう。イラクの空爆の跡を反射的に思い出す。

さらに歩むと破壊は身ぶるいするほど強烈なものに変わる。地震などというものではない。木っ葉みじんだ。瓦も窓も壁もミキサーにかけたように粉みじんになっている。一瞬にして、梁も屋根も粉になったのだ。東灘区の死者は千二百人以上。神戸の区内で突出して多かった理由がわかる。

どこをどのように歩いたのか、自分自身が被災者のように、北に南に、東に西に、行きつ戻りつしていた。あれほどリアルに見えたテレビも、事実のすべてを伝えているわけではなかった。テレビで「知った」つもりでいた自分を恥じた。

何十分かさ迷った末に、大きな建物を見つけた。テレビに何度も登場した小学校のすぐそばが、Fの家のはずだった。

このあたり、と見当をつけた路を入りかけて、足がすくんだ。入れない。そこはもはや路ではなかった。無数の破片が、無秩序に路面を覆い尽くして、一歩も進めない。「十七日から一歩も外へは出てません」とGさんが語ったのは、これだったのか。出ようにも出られないのだ……。

あきらめて、もう一筋、北に回る。

通りに面して一軒だけ残った家があった。近づくと、FとG、それぞれの表札が肩を寄せあっていた。見覚えのあるその家は、周囲の瓦礫の中にうす青いタイルも崩さずまっすぐに立っていた。この家こそ、共働き二十年、二人がようやく建てた家、丹精こめて建てた家だった。

ベルを押した。が、鳴らない。表玄関も内玄関も、とびらは固かった。それは、訪れる人を拒絶するような鍵の固さだった。無事とわかれば、訪ねるべきではなかったのだ。どんな思いであろうと、許しを得て訪ねばならなかったのに。

置き手紙と、小さな見舞いの品だけを玄関先に置いて帰ろうと、デイパックを下ろしたとき、ドアチェーンを時間をかけてはずす音がした。そろりとドアが十センチほどあき、その狭い隙間からGさんが顔をのぞかせた。

ぼそぼそと伸びた髭と髪の白さ。どんな時でも身だしなみ美しいあのGさんではなかった。

「このとおりで……。おばはんは出かけてまして……」

ドアの内側は、恐らく足の踏み場もないのだろう。

一分か二分か、声をつまらせて、私はただ深い息をした。

「……生きていらして……よかった……」

やっと声が出たとき、自分でも思いがけない涙がワッとあふれ出た。信じられないほど大きな嗚咽になった。あまりの声の大きさに私はあきれ、恥じ入り、うずくまって顔を伏せた。

深夜のテレビにFの名を見てから、思えば毎晩心で泣いていた。うそに違いないと信じようとした。涙を流せば不吉な気がして、声ひとつ立てなかった。その涙が、堰を切ったようにあふれ出たのだ。

私にはそれ以上の言葉はもうなかった。なまなかの慰めなどは言えなかった。考えてみると、Gさんは「無事だ」とは言わなかった。船場のぼんぼんらしいおっとりした声の裏側を、私は読みとれなかったのだ。「人の不幸は見たくないので家を出ない」というGさんのことばがドーンと重く心に染みた。家を一歩も出ないのはGさんのこと。その分、Fは、さぞ忙しく立ち働いてきたのだろう。

ひっそりと夫婦で、破砕の中の時間と空間を生きている。他人が乱してはならない。

小さな包みを置くと、逃げるように坂を降りた。

涙を拭いもせずふらりふらりと歩いていたからだろう。小さな辻の一つで五十がらみのおばはんに呼びとめられた。

「まあ、靴下もはかんと。さあ学校に行きまひょ。あったかいで。なあに、名前と住所だけ書けば、誰でも泊めてもらえるよ。あったかいし。着るもんもあるし。ほら、私はこんなにしっかり靴下はいとる」

えんじのねんねこを着たおばはんは、厚手のズボンの足を振り上げて、ふかふかのパイルの靴下を見せた。

足元に目をやると、スパッツからむき出した足首は薄むらさきだった。真冬でも素足を健康法にしている私は、よく人に驚かれるが、寒さを感じたことはなかったのに、この朝の零下一度は厳しかった。靴の中で、指がかじかんでいた。被災者に見えたのも、むりはなかった。からだ以上に心が凍っていた。

「ありがとう」と、土地の人のアクセントで礼を言うと、青いズボンのおばはんの反対の方向に走り出していた。「あったかいで」と、二度も呼びかけたおばはんのあったかさで、涙が乾いた。

「焼きたてのパンあります」
貼り紙が目に入った。倒れ残った小さな店に積み上げられたパンに吸い寄せられるように中に入った。チーズパン八十円。エビのフリッター八十円。それは、ほんとうに焼き立ての熱さだった。
受け取るなり売り手に背を向けて、立ったまま、チーズを、エビをチーズを、間もおかず、不作法に口にほうりこんだ。
「何がほしいって?……そりゃ、あったかいものですよ」
テレビのインタビューで、何人かの人がそう答えたのを思い出した。そこに温かいものがあったのがしあわせだった。小ぶりながら、申し分ないおいしさのパンは、東京なら、一つ百五十円はするだろう。ここは温かい町だった。

温かさが正気を取り戻した。背筋を伸ばして、もと来た坂を引き返した。
坂の中腹のFの家を、すこし離れて、今度はやや落ち着いた心で眺めた。
屋根の一部は、青いビニールで覆われている。横壁にはひびが走っている。長年ひとつひとつ集めた貴重な美術品類は、たぶん粉々になったろう。家が残ったからといって、「無事」ということではなかった。
周囲にたくさんの犠牲者を出しながら、たった一軒建ち残ったFは、さぞつらいだろう。「人の不幸は見たくない」という言葉の重みがさらに胸に泌みる。でも、あなたは、戦災孤児だったのだ。すでに十分すぎるほど十分、苦痛をなめて生きてきた。五十年前、猛火と闘って闘って闘い抜いたご両親が、今度は鬼神となって守って下さったに違いない。
両掌を合わせて、避難者センターの小学校に向きを変えた。

避難所

校門を入ると、真っ黒なテント群が校庭を占めていた。自衛隊の黒いテント、とテレビで言っていたが、数十の黒テントは不気味だ。どのテントにも、風を通す一センチの隙間もない。それは寒風からというよりも、周りの人の目から自らを守る姿に見える。
どこでも学校の建物だけはふしぎに無事に見えたのに、この小学校はひび割れがひどく、危険を恐れる人々は寒風に吹

きさらされながら校庭で焚き火を、とテレビで聞いた気がする。あれから何日かして、テントが届いたのだろう。ぎっしりと建ち並ぶ黒テントは、魔女の群れに似ているが、それでも、見渡すかぎりの大部屋暮らしよりはホッとする。一つのテントに一つの家庭があるのだ。

「そこは危ないよ!」見入っている私に怒声が飛んだ。足もとに亀裂が走っていた。

矢印をたどって受付に行く。乱れた文字の貼り紙があった。「安否の問い合わせは、ここではわかりません。非難民名簿なら矢印の奥にあります」

矢印が、奥へ奥へと伸びている。受付のほかに事務局があるようだった。学校に問い合わせればFの安否がわかるかもしれないと私が思ったように、全国から、電話が、手紙が、殺到しているのだろう。

受付のドアを開けると、窓という窓が救援の段ボールで隠された室内は薄暗く、ひやりとした空気の中に、何人かの三十代の男性が見えた。

見舞いの品をさし出した。重い物は持てない私が思いついた、耳かきの束だった。これなら多分、重複しないだろう。

一番入り口にいた、一番屈強そうな男性は、包みを開けもせず、ニコリともせずにほうるように段ボールの上に置いた。

「いま一番必要なものは……」

「何も彼も足りません。どんなものでもほしい」

千数百人の避難者に対して、百をこえる段ボール箱はほとんど無意味に見えた。私は自分の小さな包みを恥じた。

「どんなものでもほしい」——それは本当だろう。引揚げた時、我が家は空き瓶一つでもほしかった。バタ屋のように、あちこち拾い歩いたことを思い出した。後に笑い話でそれを話したとき、聞き手は目を大きくして言った。「そんなものがお困りだったのですか。おたくあたりにそんな失礼なものはさしあげられないと思っていました」

でも、本当に、「どんなもの」でもいいのだろうか。島原に送られたどっさりの中古衣料に、被災者たちがひどく腹を立てたという話を思い出す。

「どんなものでもほしい」というのに、段ボールは開けられもせず積まれている。ここには、千数百人分ずつ、耳をそろえて持ち込まなければ無意味だったのだ。

受付にではなく、大部屋に足を運んで、年老いた方の肩を

もみ、悲しみを聞きながら耳掃除をすべきだった。来るということだけで精一杯だった自分が、恥ずかしかった。耳かきを渡してしまったいま、大部屋には、とても行く気にはなれない。見知らぬ人間が訪れても、それは「不幸を見に来た」ことにしかならないだろう。

重い足を引きずって、西宮に歩き出した。西宮で〈すばる〉の石井布紀子さんが獅子奮迅の活躍、と聞いていた。

若者たち

どのテレビも新聞も、長田、東灘、三宮を繰り返し報じていたが、西宮のシーンはなかった。損害軽微と思っていたが、大阪のタクシーの運転手さんは「西宮はひどいよ」と言う。

そのとおりだった。西宮北口から見おろすと、大きく破壊された町角が何か所も見えた。その破壊された方向に歩き出した。

「熱いスープをどうぞ」

五、六人の若い衆が、紙コップをさし出している。

「トマトがいいですか。五目でっか」

そんなぜいたくな。熱いものなら何でもよかった。

一度には飲めない熱さを、ふうふうと吹きながら、のどから胸、胸からおなかへと流し込んだ。

「……ありがたい。どこの方……」

「マクドナルドです。店は開けないし、せめてボランティアを、と思って」

「もう一つ頂いてもいいですか」――この熱さを布紀子さんに届けたかった。

飲みかけのコップと、新しい一つをバッグに入れようとすると、「こぼれますよ」一人が店の奥に急いで、ビニールのコップホルダーに二つ揃えて入れ、ビニール袋で包んだ。ここにも温かい心があった。

沿道にはほかほかと湯気を立てて肉まんを売っている屋台もある。一個百円。

「深津はどのあたりでしょう」

客と思ってほほえみかけた売り手は、問いかけると急に硬い声になり、「さあ……うちら、知りまへん。隣に聞いてみ」

一個六百円の幕の内を並べていた隣は、「わかりませんなあ」――尼崎から来ているので……と断った。八個三百円の

タコ焼きも、被災の西宮をあてこんで来た人のようだった。
お巡りさんも、みんな道を知らなかった。皇室の吉凶の日と同じだ。全国から派遣された人びとばかり。ポケットに地図が入っているわけでもなかった。
行き交う人もまた旅人ばかりだ。澤田さんが手渡して下さった地図の拡大コピーを広げて、それらしい方向に向かう。
信号の向こうに思いもかけず、〈すくーる・すばる〉の大きな看板が見えた。軒先に救援品が山と積まれ、忙しそうに立ち働いている男女が見える。〈すばる〉は、救援センターに早変わりしていた。店先に川崎紀久子さんがいた。
「あっ」と握りしめたその手の、冷めたいこと……。
「ほら、これ」
スープをさし出すと、「まあ。……それは奥に持って行って」――川崎さんらしい遠慮だ。朝からの風にさらされて、パーマの髪は横に広がりっぱなしというのに。
氷のような指に、むりにカップを握らせた。
店の中をのぞいた。
「わァ千代ちゃん！」顔見知りの伊藤美恵さんが抱きついてきた。やっと私の座る場があった。

山幹（やまかん―山手幹線）に面した＜すばる＞には、活気があふれていた。

同じ救援センターでも、あの小学校とはなんと違うのだろう。部屋じゅうの空気にエネルギーがあふれている。誰ひとり止まっている人がいない。救援品を仕分ける人、ラベルを貼る人、帳簿をつける人、電話に答える人、その真ン中で、かかりっ放しの電話の一本に、早口で答え続けているのが石井布紀子さんだ。

「布紀ちゃん、話したいこと、書きたいことが山ほどあるんだって？」

そのそばに座り込んだ。

「ここは みんなやさしい人ばっかり。スゴイいい人ばっかりなの。状況がガンガン変わるでしょう。天国と地獄を行ったりきたりという感じ。私がもうパニックで、鬼になったり天使になったり……。そういう波長を受けとめながら、みんな包み込んでくれる。こんな幸せって、ないなァ」

「それにしても、ずいぶん揃ってるのね。米、しょうゆ、雑穀しょうゆ、塩、砂糖、ふりかけ、干リンゴ、アレルギー用食品、アメ、ドロップ、ほ乳びん、生理用品、かぜ薬、靴下、タイツ、パンスト、パンツ、スリップ、軍手……。あ、今ないのは洗たくひもに洗たく挟み、ビタミン剤か……」

「ビタミン剤はもう入った。洗濯ひもと洗たく挟みは、まだ。これから多分必要になるのが、包丁、まな板、コンロ、大なべ、湯わかしポット、ガスボンベ。早いとこ、自分たちで炊き出しできるとこまでもっていきたい」

「配給の食糧では不足なの」

「そうじゃないの。自分たちで立ち上がる。自分たちで生きなくちゃ」

「いま一番ほしい物は」

「土地と現金。地元の産業の復興に使うお金と私たちが自由に使える土地がほしい。情報発信の基地。そこに炊き出し用のステーションも出来たらいいね。ゼロから何でもできることを示したい。行政が厳しく見ることもあるの。瓦礫を使っても困るというような対応をされた人もいて」

「ふーん」

「でも、よかったことも、うんとある。ここで働きたいという人がどんどんふえてる。顔の見える救援ができるからかな。人間と人間が見える。ね、小田原のはじめ塾の加藤さんに言われたの。布紀ちゃん、よかったね、こんなラッキーなことはないよって。二十代でこんな経験をするなんて、って」

パッと顔が輝いた。

「ほんと。ラッキーよ。空襲、引き揚げ、アルバイト……。十代、二十代は、私もすさまじい経験の連続だったけど、それはほんとにラッキーだったと思ってるもの。それが今の私の財産」——真顔で私も答えた。

「バイクで思いっきり無法地帯を走り回ったの。対抗車線走ったり、アーケードの下、走り回ったり……。今は何でもできる」

高いボルテージの布紀ちゃんの声を聞きながら、戦災者列車の床に新聞も敷かず寝そべったとき、あ、これからどんなことでもできる、と思ったことを思い出した。電車の吊り革もつかめなかった汚ながり屋の私が、その瞬間、パッと割れたこと。

「この地域で三年、塾をやって、地域に根を張っていたことが役に立ったわア。ね、見て。本も道具もみんなめちゃめちゃになった中で、たった一つ倒れなかったのが、この〈らくだ〉のプリントだったのよ。だから、すぐに塾を始めたの。いま子どもたちが一番大事だもん」

救援品で埋まった十畳の一隅、プリントの棚の前に四分の一畳ほどのたたみが見える。そこが〝塾〟らしかった。

「いやなことはなかったの」

「いやだったのは一部マスコミの取材の仕方と、自分を善意と思いこんでる人の態度、それから看板を掲げた組織のあり方かな」

「ヘリの音で、助けて！の声がかき消されたり、震動で崩れかけた壁が落ちたりしたんですってね」

「そう。それに重荷だったなア、取材。無縁の人たちが来るんだもん」

「善意の人のどんな態度がイヤだったの？」

「たとえば、アトピー用のミルクおくります、って言うの。今は間に合ってます、と、いくら言っても、これは絶対必要です、値打ちがわからないんですかって、何十分もしゃべり続けて一歩も引かないんだもの。与えたい人間のニーズが強くて、受け手のニーズが弱く、届きにくくなる。余裕がある人の善意って、怖い。怖い」

運動をする人にありがちなそういう思い込みは、日常の活動でもよく遭遇する。わかる。わかる。

「看板っていうのは……」

「看板と一緒に送られてくることがあるのよ。何々製薬です、何々食品です、って。精神に傷がつくわよねぇ……。ね、たとえば〈あごら〉の言いなりにはやりません、って私が言ったら、どうします?」
「どういう意味?〈あごら〉では、どんな注文もつけないわよ。運動を一緒にやるってことは、片目どころか両目つぶるってことでしょ。……そんなに注文が多いの?」
布紀ちゃんはコックリうなずいた。
「あ、アワ、ヒエ、コーリヤン、オーツもある。これ、アトピー用なの?」
「おかゆの素よ」
ここでは、アトピーやアレルギー専門のセラピストもいて、懇切に相談にのっている。スタッフの伊藤美恵さんの発案だ。
「ところで、何から始めたの?」
「調査。いやがられながらやり抜いたの。だって、情報が絶対必要だと思ったから」
誰が何時にどこを訪れ、何という人に会い、どういう回答を得たか、百枚は確実に越える調査票の一枚一枚をめくると、答えた人の表情まで浮かんでくる。
「道を聞かれたらきちんと教えてあげられる。あったかいお茶を出せる。それが、ここのモットーよ。マスコミが来ても、ボランティアが来ても、土地のことはわからないでしょ。情報があればすぐに動ける。〝障害〟者、外国人、お年より。一つ一つの声に対応するためには、調査がどうしても必要なの。それがないから、保育園に婦人用品が届いたり……。品物持ってくとね、『どこの団体や。置いて行かれても困る』って言われるの。『あんな奴アカン』じゃなくて、自分たちで何かする体制をつくりたいの」
だぶついたパンを捨てる避難所がある一方、一日一食の所もある。ぬれた毛布、腐ったくだものがあふれている所も。
「ネームバリューのあるグループだとえびす顔だけど、私たちのような名もない所はダメ。〈すくーる・すばる〉ですって名乗ったら、それは宣伝臭くてアカン言うから、〈でんねん〉にしたの」
「でんねん……って?」
「地震でんねん、そうでんねん。ここの言葉よ。ほら、お酒の名が〝でんねん〟」
壁にかかった空き瓶のネームから思いついたらしい。

「そしたら、『ふざけてる。ダメだ』って。それでDENNにしたらOK。いま頭のいい人が、Dはディスカバー、Eはエクセレントとか、考えてまーす」

「……行政やねぇ……」

「私らも、初め、頭からポッポと湯気立てて怒ってた。市役所で、石頭のおじさんたちに、『私たちだって被災者デース』ってどなったら、いい年をしたおじさんたちまで一斉にどなったの。『私だって被災者デース』って、おんなじ節回しで。それで大笑いして、一挙に仲良くなった。行政も、我が家のことを振り捨てて頑張ってる。行政とも、仲よくしないとダメデース」

勢いづいて布紀ちゃんは、一気にまくしたてた。

「うまくいってるグループって、必ずいいリーダー的なスタッフが数名いるのね。そういうリーダーがきちんと筋を通して、寝たきりの人も平等にケアしてるし、行政からもちゃんとモノを取ってくる。そういう所に、ボランティアが定期的に回ると、相乗効果があがる。そういうスタッフの質と量に私は恵まれているみたい」

「最初が水の時代。次が米の時代だった。家がつぶれてても実感がない。生きててヨカッタネって。それが、すこしややこしくなってきた。こわれかけた家、直すのか、こわすのか、隣の家との調整も大変やし。何でもスッキリ捨てられる人はいいけど」

「ね、ドロボーもずいぶん増えたのよ」

一気呵成にしゃべりまくる布紀ちゃんに私はわざとシラーッと言った。

「ええ、日本じゅうのドロボーが神戸に集まってるって聞いたわ」

「えっ」

サッとみるみる顔色を変えた布紀ちゃん。

「日本じゅうの警察も、神戸に集まってるんだって。だから、これで日本じゅうのドロボーが全部つかまるんですって」

布紀ちゃんは、初めて声を出して笑った。

秒という休みもなしに次から次にかかってくる電話。司令を仰ぐメンバーたち。あまりのハイテンションで、夜がふけても眠れないという。バタッと気を失って眠って、……それも二、三時間で目覚めてしまう毎日。

代わってあげたい。でも、私は代われない。なめらかな、

やわらかな関西弁の応答。頭いっぱいしまいこまれた必要情報のデータベース。とても私にできる仕事ではない。ここにも、やっぱり私の座る場はなかった。それよりは、早く帰ってこの話を伝えよう。できるだけのカンパを集めて送ろう。電話代だけでも月何十万かになるだろう。次から次に、必要な品が、これからふえてくるだろう……。

立ち上がってトイレに回った。朝の五時から午後一時まで、ほとんど飲まず食わずだったせいか、トイレの必要も忘れていた。

トイレには大きな黒いポリ袋があった。紙は流さずに袋に入れる。まだ断水は続いていたのだ。袋はイラクを思い出させた。そして、うず高い排泄物の山も。ここにはそれはなかったけれど、多くの避難民が、飲み水の次にトイレ……と言った意味を、テレビのこちら側で、私は感じとっていた。寒い季節で、まだよかった。

手洗場にはボールに少しの水があり、「これは使ってもいいです」と添え書きされていた。脇に置かれた一本のペットボトルは、またもイラクを思い出させた。水、水……と、イラクの人びとが死んでいく一方で、クルド族はミネラルウォーターで顔も手足も洗っていた。国連の救援はクルド族にだけ集中していた。そのイラクには、四年後の今も厳しい経済制裁が続いている。

壁に貼られた注意事項を写しとって、私はここを出た。

1．くわしく困っている状況をきく。遠慮している人には具体的に質問する。

2．物資——「一両日中に持ってくるよう努力する」と回答する。

3．頼まれたもの——依頼者の名前を呼んで、「昨日参った者です」と名乗る。

4．時には窓口を通さずに、友人がいるふりをして入る。とがめられたら、「石井布紀子に頼まれて友人に届けに来た」と言う。

5．具合の悪い人には、医者や薬局との連絡がしっかりしていることを伝え、連絡先を渡す。

6．アトピー——対応ができる人がいることを伝える。食べられる物をきく。小児科医もいることを知らせる。

7．老人には——おむつや着替えが足りているか、泊まり先があるか、洋服のサイズをきく。

帰りしなに、店先をもう一度見回すと、ピカピカの自転車が十数台、銀輪を光らせていた。

貼り紙があった。

［どなたでもご自由にお使い頂けます。ご相談ください］

国道二号線

西宮北口へ、とぼとぼと歩きながら、考えこんでいた。

仁川の高木由利子さんも心配だ。仁川は激しい地滑り。たしか駅から遠くはなかった高木さんのお宅を思い出した。二十数年前、主婦が始めたタイプ屋さん。ミニコミ『わいふ』の出発点は、素朴で温かかった。生涯忘れられない取材先の一つだ。が、いま、仁川への交通機関はない。

積もる仕事に追われている。今日のうちには東京に帰りたい。迷う心を、布紀ちゃんのキッとした一言が痛打した。

「神戸市役所の老人センターには行って。見て。嗅いで。――あの臭い。それから長田。あそこは一番絶望があったから、一番希望もある」

ほんとのところ、体調は最低だ。大阪まで這うようにしてやっと来た。自分の残り時間。しなければならない仕事……。

その心中を見すかすように、布紀ちゃんはさらに厳しく私を打った。

「〝今〟でなければダメなの。今日と明日とでは違う。毎日毎日違っている」

……〝今〟でなければダメ――どこかで聞いたことばだ。

思い出した。湾岸戦争後のイラク。

「フセインは、被害の跡をきっと隠そうとする。イラン・イラク戦争の時も、空爆の跡は翌々日にはきれいになっていた。一日でも早く現地に入ってほしい」

現実には隠す余力などイラクにはなかったが、一年後、その一年前に立ったすべての地点に再び立って、〝今〟をのがさなかった意味を、痛いほど知った。

まして、全力をあげて復旧しようとしている超大国ニッポン。この日、二七日。二七日でも遅すぎる。

西宮北口から歩いてＪＲ西宮へ。三宮に向かうバス待ちの長い行列の後ろに、気がついてみると立っていた。

特急は行列待ち二時間、乗車時間二時間半。隣から、各駅停車が出ようとしている。

「何時間かかります?」
「三時間半から四時間」
私が乗り込むとすぐ、バスはそろりと動き出した。

各駅停車でよかった。

自転車ほどの速さで、沿道の風景がゆっくりと動く。人の背よりは高い車窓から、沿道の右も左もよく見える。右は山の手、灘五郷、左が海側。被害は海側に集中……と、テレビの地図では見えたが、山側、巨木に囲まれた芦屋の豪邸で、巨きな松ごと倒れている築地塀もあった。活断層は、西宮と芦屋の境界にも走っていた。金持ちには被害はなかったというのも真実ではなかった。

木造よりはずっと堅牢と伝えられたプレハブも、折り紙のようにもろく吹き飛んでいるのもあった。「倒壊の原因は重い屋根瓦」という情報も多かったが、瓦をのせた板ごと、滑り台から滑り落ちるように落ちた屋根も多い。

しかし、大ざっぱに言えば、壊れたのはほとんど老朽木造家屋か はやりのモルタル造りで、まるで狙いうちされたように貧しい家だけが足を折られ、屋根を傾しがせている。

頑丈なビルとビルに挟まれた手弱女(たおやめ)ふうのペンシルビルは、右になびき左に傾いた末に、へなへなと崩折れている。屈強なビルにしなだれかかるようにして全壊を何とか持ちこたえたものの、危険な姿をさらしている弱小ビルも多い。

ちょうど四十五度、ピサの斜塔のように傾斜しながら、一階に「カレーライスとコーヒーあります」の貼り紙を揺らせている店もある。

「結局、大手の建築やな、残ったのは」

相づちを打つ声が聞こえる。

しっかりと工費を惜しまなかったのは見事に残り、再起の厳しい弱者ほど、激しく打ちのめされたのだ。

生死を分けたのは、まさしく資力の差だった。

六甲の堅い岩盤の上に、惜しみない建築費を注ぎ込めた人の中には、停電と断水を嫌って、大阪の超一流ホテル、スイートルームに居続けている人も多い

一階でコーヒーとカレー販売中

という。私はいつか目を閉じていた。

三宮

三宮で降りれば市役所は真ン前、とは布紀ちゃんの説明だったが、降ろされたバスから市役所までは、それほど近い距離ではなかった。おかげで、奇妙なふしぎな三宮を、ためつすがめつ見ることができた。

五階の窓だけが、くの字に折れ曲がって、今にも路上に砕け散りそうなビルがある。窓という窓が、爆撃を受けたように砕け飛んでいるデパートがある。六階だけがぐしゃりと潰れたビルもある。まるで短冊のように、窓も壁も細く切り裂かれたビルも……。

バグダードで試用された新型爆弾の数々を思い出す。

神戸の顔。名うての大ビルが立ち並ぶこの町に、ナマズは白鯨のような暴れ方をしていた。

どんな力学が働いたのだろう。それぞれのビルの設計者は、施工者は、施工主は、どんな思いで眺めたのだろう。崩れかけたビルは路上にせり出し、いま余震があれば、二次災害、三次災害が出ることは明らかだ。その崩れかけたビルの階段を何度も上がり降りして、会社の書類を運び出していた若い社員が、テレビに顔をさらして言った言葉を思い出した。

「企業戦士だなんてカッコよく言いますがね、なんでこんなことまでしなければならないのかと思いますよ」

テレビはその企業名を伝えなかったが、一人の市民として、私はその名を知りたい。来年、「就職情報」誌を出すとしたら、そういうデータこそ重要ではないのか。

路上には、「危険・立入り禁止」のロープがあちこちに張られ、迂回に迂回を重ねながら歩かなければならない。その危険地帯のあちこちで五十か六十か、白髪もまじるアマチュアらしい男たちが、何人も何人も、カメラを、ビデオを、回し続けている。一九九五年ビデオ賞でも狙うのだろうか。崩れかけたビルに打つ手もない政府や自治体や自衛隊の中で、彼らだけが妙に生き生きしている。

「日本人」――そんなタイトルで彼らを撮りたくなったが、この旅に、私はカメラを置いて来ていた。澤田さん心づくしの使い捨てカメラの残りのフィルムはもうほとんどなかった。

神戸一番の盛り場には、資力の差による吉凶の別れ道は、

一見、なかった。デパートのように窓の多い建造物の構造上の欠陥や、建て増し、継ぎ増しの脆弱さが、一気に露呈したようにも見えた。あるいは逆に最先端技術を誇った〝これまでにない〟仕掛けが、その計算の甘さを示したものもあるように思われた。しかし、内部がほとんど全壊した神戸新聞の社屋の古さは、やはり資力と関わりがあったのだろう。

神戸市役所旧庁舎も、その古さのゆえの破壊かとも思われたが、今度の災害で最も大きなダメージを受けたのが、橋、道路、線路などの公共建造物であったのと同様、そこに甘い発注、甘い検査、甘い仕組みはなかったのだろうか。

そのすぐ隣の新庁舎は新しい建築基準だからか、高層でありながら無傷だった。一階のロビーには、ハングル、英語、中国語、ポルトガル語などの貼り紙が、安否を問う日本語にまじってたくさん貼られている。国際都市神戸だ。

高齢者たちは二階・三階のフロア一面に敷きつめられた思ったよりはきれいな新品のふとんにくるまって、みんな無言だった。その中に入ること、取材することはためらわれた。私は靴を脱ぎ、知り合いを尋ねるふりをして彷徨した。布紀ちゃんの言う「臭い」だけは、心に刻んでおきたかった。

あちこちで咳が聞こえたが、懸念していた臭いは、被災二七日のこの日、すでになかった。「一日一日変わる〝今〟を見てほしい」という真実を知るためには私は遅すぎた。

新宿ジェントルメンのように、段ボールを周りにめぐらした人は、少数ながらいた。自分だけのプライバシーがほしいのか、風が冷たいのか、インフルエンザが怖いのか、もともと段ボールとなじみ深いのか、問うすべは、もとよりなかった。

歩く

長田へは、JR神戸駅からバスが出ている。神戸までバスがないわけではないが、待ち時間を含めて三時間から五時間はかかるという。バスをあきらめて歩くことにした。

車道の大半は分速一メートルかとおもわれる大型バスと大型トラックで埋められ、その隙を縫って小形タクシーとバイクがうなっている。危険と知りながら、歩行者はガラスの破片が散乱するアーケード下へとなだれこむ。

一列縦隊。みんな黙っている。

まるで葬列のような群衆。
どこかで見たような……。
そうだ。空襲下の人びと。
空襲の度に、市電の高架は垂れ下がり、当然のことのようにみんな黙って歩いた。東京駅から動員先の越中島まで何十回歩いたことだろう。中野から越中島まで、時には中野から浦和まで歩いたこともある。「歩け歩け」そんな〝国民歌謡〟がラジオから流れていた遠い記憶――。
ふいに背中をドンと突かれた。ハッとした時、一七〇センチは優に越える背丈同様、肩幅も広い男が、左脇をすり抜けて、足早に去った。
悪い予感はあたった。
何分かして、後ろから声がした。
「ファスナーがあいてまっせ。締めときまっか」
五十くらいのおばはんだった。
私はだまってうなずき、だまって頭を下げた。
足もとの瓦礫だけに注意を払うと、歩いていてもほとんど何も見えない。行軍の兵隊が風景も見ずに歩いたというのは、こういう事だったのか。危険がいっぱい、どこも立ち入り禁止のアーケード下なのに、誰かが歩くと、我も我もと歩き、いつしかそこがどんなに危険な所かを忘れている。戦争に傾斜した時、高度成長に浮かれた時、日本人はみんな、こんなふうに歩いたのではないのか。
ふいに、ぶ厚い紙の束をつかまされた。若い男の手がスッと伸びて、手の中に、緑色のビラを押し込んだのだ。
ビラを握りしめたまま、歩く。歩く。立ち止まって読めば、後ろの人の邪魔になる。歩くほかない。
やっと視界が開けた時、何軒かの露店が見えた。
熱いお茶あります。その文字の方へ、夢中で向かっていた。
「やけどしますよ。タオルか何かありまっか」
さし出された小さな缶を、緑のビラを半分取り出して受けとめた。やけどは防げたが熱い。とても飲める熱さではない。包んだチラシごとコートのポケットに押し込んだ。コートとセーターを通して、カイロのようにおなかが温まった。携帯コンロで煮立てた湯の中で、お茶は、コーヒーは暖められているようだ。百五十円と覚悟した一缶は、百円ポッキリだった。
ふかふかのジャンパーやズボンを売っている店もある。価格破壊の東京と同じ安さなのが嬉しい。やっと少し気持ちが

落ち着いた。

手の中に残った残り半分の緑のビラを広げた。五枚あった。受け取った時、二十枚渡されたと思ったが十枚だったのか。B5判のビラは、高価な色上質紙特厚口、斤量で一一〇キロ。十枚を二十枚と感じた理由がわかった。私たちなら、再生紙、四五キロ、それも仕上がりB6にする。軽いほうが、小さいほうが、撒きやすい。もちろん経費は四分の一になる。

ビラの発信者は自治体だった。

> 徳島県では、すべての被災者の方の県内小・中・高等学校等への転校、公営住宅への入居、医療施設の利用、社会福祉等への入所などのご相談をお受け致しております。
>
> 相談窓口　大阪市中央区南船場三－九－一
>
> 電　　話　〇六－二五一－三二七三

ナイロビのNGOフォーラムで、日本の自治体が無料で配っていた高価なパンフレットを思い出した。A4版四色刷り、八ページから十六ページが、ぜいたくにばらまかれていた。アフリカでは教科書を持てない子どもがほとんどというのに。現地のポスターの手書きの一色刷り、落とし紙のような粗さを一顧もせずに、配ることに夢中だった自治体おかかえの名流婦人たち――。

ビルから降るダストかと思っていた。それは粉雪だった。マフラーを鼻から口に巻きつけた。どんな異様な恰好をしても驚く人はいない。被災者を訪ねる人も、一種の被災者だ。

長田

一時間半歩いて着いたJR神戸駅に長田行きバスはなかったが、思いがけず姫路までの電車があった。

「西へはぎょうさん走ってまーす」

駅員の興奮した声が人の渦の上を、うず巻くように響く。新長田駅は駅舎が陥没している。その手前の兵庫駅か、その先の鷹取で降りればよいと、駅員は親切だった。

開通したことがまだ知られてないのか、電車は空いていて、海側も山側も被災の跡が目近に見えた。

五十五か、六か、作業服のおっさんが、大声でしゃべって

いる。
「何と言うても、一番ごっつうやられたのはこのあたりやな。助けてと声が聞こえても、どうにもならんかった。ボーン、ボーンと、次から次に爆発してしもうて」
長田については、悪いうわさが流れていた。この機会に放火したに違いない。目障りなあの一帯を焼き払いたいのだと。
しかし、おっさんの話は、真実を伝えているように聞こえた。ケミカルシューズの製造街。軒なみシンナーがあったはずだ。この地区ではプロパンもまだ使われていたという。
「ボーン、ボーンだ。どうにもならん」
おっさんの大声に、隣の男はだまってうなずいた。車窓の外へは全く目をやらずに。

＊

駅から東、長田は以外に近かった。甲子園の何倍かという焼け跡は、黒く広がっていた。なつかしい風景だった。
これは空襲だ。猛火が地震の爪跡を消し去っていた。
重く暗い空に粉雪の舞う焼け跡を、私はだまって歩いた。
押し合いへし合う三宮、元町、とは違って、日が暮れたからでもあろう、ここにはほとんど人影がない。半分焼け残った四階建て五階建てがポツンポツンと見えるだけで、建物もほとんどない。私はただ〝臭い〟をたずねて歩いた。
あの〝臭い〟はなかった。
三月十日から一と月たっても、東京はまだくすぶっていた。最後まで煙を出していたのは、そこなら大丈夫だろうと人びとが逃げ込んだ小学校だった。くすぶり始めた人びとを助け出す手だてはなく、〝臭い〟は一面の地べたにしみこんだ。それから十五年間、私は焼き魚が食べられなかった。
「空襲よりは救いがある」
思わず独り言が出た。
焼けた面積がこの何百倍か何千倍か、限りなく広かったというだけではない。一晩に十万人が焼け死んだからでもない。自然災害は結果として人が死ぬ。空襲は人を殺すために空から襲いかかるのだ。B29は、まず焼却予定地を、外科のメスを入れる区画マークのように周囲から焼き、逃げ場を失った人びとを今度はじゅうたん爆撃した。
三月十日の一か月後、私は、ある海軍士官に、一枚の、二色刷りの地図を見せられた。米国の横浜領事館で見つかったその地図には関東大震災の横浜市中の発火点が、詳細に記さ

れていた。それは、それぞれの発火点から、どのようなつむじ風が起こり、火の玉がどのように市中を走ったかを明確に記していた。東京も、横浜も、この地図に基づいて、正確に焼かれたのだ。つむじ風は、正確につむじ風を呼んだのだ。

長田の火災を報じるテレビで、アッと息をのんだ時、私は今まで誰にも話したことのなかったこの絵図を五十年ぶりに思い出した。テレビ画面のつむじ風はつむじ風を呼んでいた。ボーン、ボーンがそれだったのだ。

それを知っていたのか知らなかったのか、自衛隊の兵庫地区災害予測図には「長田区は全焼」と明記されていたという。とすれば、意図的なホロコーストではないにしても、これもまた人災ではなかったのか。一日一二九億円。毎日毎日一二九億円が防衛費と呼ばれる戦費のために費消されている。戦車やAWACSやPC3や戦闘訓練のためにではなく、人を救うために毎日一二九億円が使われていたとしたら、米国の新聞に、「日本にはインドよりも粗末な家々が建ち並んでいる」と書かれたような、危険と紙一重の住宅はとっくに建て替えられていただろう。日米合同軍事演習の代わりに、自治体と連携した災害救援演習が行われていたら、初動は当然早かっただろうし、その後の混乱もなかったろう。これも人災だった。

それでもここにはまだしも救いがある。災害状況が克明に公開され、あらゆるメディアを通じて全国民が惨状を知った。遅れたとはいえ、救援の手も打たれた。

救援――長い間忘れていた五十年前の記憶が、また一つよみがえった。

三月十日、東京、越中島。昼過ぎようやくたどり着いた動員先で、炊き出しが始まった。私たち三人の動員女生徒は、アルミの器に水を満たして待った。十分にむらしてから、手を水に浸して作業に入る手はずだった。が、大釜から湯気が吹き出しかけると、人っ子一人いなかった焼野原に、いつのまにか長い長い長い長い列が伸びていた。炊き上がるか上がらないか、数人もの黒い手が、サッと釜のフタに伸びた。

待っていられなかった。飛び上がるほど熱いごはんを、素手で握った。あまりの熱さに反射的に涙を流しながら握った。手を水に浸しては握り、握っては水に浸し……。浸しても浸しても、耐えがたい痛さだった。千個のおにぎりを握り終えたとき、てのひらの皮がベロリと剝けた。が、奇跡も起き

た。暖房のない寒さに三センチほどもふくれ上がっていた手の甲と指の霜やけが、うそのように治っていたのだ。

呆然自失からふと我に返った時、見渡す限りの焼野原には、もう人っ子一人いなかった。どんな行列だったのか、焼け焦げた防空頭巾と、黒い手、黒い指だけは覚えているが、どんなに思い出しても、行列の中の女も、子どもも、思い浮かばない。炊き出しは、これが最初で最後だった。そして赤くべロリと剝けたてのひらに、薬を塗ってもらった記憶もない。

そう言えば、避難所の記憶もない。人びとを収容する所などどこにもなかった。無料の乗車券だけは渡され、すすでくまどりした、血のように赤い目の人びとが列車に殺到した。しかし、ふるさとは、焼け出されに温かくはなかった。

それでも列車に乗りこめた人びとは幸せだったのだ。

なぜ避難所がなかったのか。五十年経って、私はやっとわかった。

みんな死んだのだ。逃げられた人は全くの僥幸だったのだ。

神戸三十五万人の避難民。その多さには胸がふさがるが、裏返せば、被災しながら三十五万人は助かったのだ。

政府も自治体も、助かる人の多さをほとんど計算していなかったのは、ヒロシマ、ナガサキ、東京、大阪、名古屋、全国各地で人びとが犬死にした〝戦争〟だけを、〝安全〟の対極に想定していたのではないだろうか。

〝安全保障〟の名の下に、戦後五十年、今なお全国各地に基地を持つ米軍。しかもその七五パーセントは沖縄に集中している。日本はいわば沖縄という娘を身売りして繁栄を得たが、四八基の原発同様、他国の軍隊の存在が危険でないはずはない。国が「安全を保障する」ということは、国民の生命・財産を守るということ。死傷者も難民も発生させない最良の手段を考え、実行すること以外ない。国にその基本的姿勢がないことが、〝神戸市株式会社〟を許し、かくも大勢の死者・負傷者と〝難民〟を発生させる引金ともなったのではあるまいか。

かつて「難民」を「戦災者」「引揚者」と呼んだメディアは、いま「被災者」と呼ぶ。もし「被災者」を「難民」と呼べば、ボスニアが、ルワンダが、ぐっと身近になるだろう。そこに送るべきものは自動小銃を持った兵士ではないことも見えてくるだろう。

最大の難民は職も血縁も地縁も地盤も失った者だ。引揚難

民には、戦災難民にもまして職も地縁も地盤もなかった。だから多くの戦後死があった。今も別れたまま会えぬ親子も多い。戦後一千万を越す難民がどんなふうに生きどんなふうに死んだか、知る人はほとんどいない。まして、〝聖戦〟の名のもとに、日本が中国に、アジアに、何百万何千万の難民を発生させたか、その人たちがどんなふうに生き、どんなふうに死んだか、思い及ぶ人はほとんどいない。書かれていない歴史が無数にあるかぎり、戦後は終わらない。

三百万の自国民を犬死にさせ、千数百万のアジアの民をあやめながら、その責任をとらぬまま、経済復興にだけ心を奪われ、汚辱と虚飾の繁栄を築き上げた日本人に、神は大きな鉄槌を下して警鐘を鳴り響かせたのだろう。

たった一つ救いがあるとすれば、五十年前、業火に焼かれながら、日本人は、ほとんど誰一人、その同じ日本人がアジアの各地で同じように家を人を焼き尽くし殺し尽くす姿も、日本の被爆にアジアの人びとが拍手する姿も思い浮かべなかったが、いま、この大災害は日本の偽りの繁栄に基因すると、多くの日本人が心のどこかで気づいていることだろう。

あれほどの人柱を捧げながら、日本は生まれ変わるチャンスを逸した。願わくば神戸は〝復旧〟でも〝復興〟でもなく、〝創生〟してほしい。捨てるべきすべてのものを捨て、改めるべきすべてのものを改めて、本当の〝人間の町〟になってほしい。その時、助けてと言いつつ散った五千余人の魂も、初めて天国でやすらぐに違いない。

思えば神戸は、私の日本での生活の出発点だった。空路がなかった五十二年前、南の島から三泊四日の船旅を続けて、神戸の港に降り立った時、私はかがみこんで土の香りをかいだ。父が母が、あれほど愛した祖国ニッポンの土。――四年の学業を終えて、またふるさとに帰るはずだった私は、それ以来帰ることなく、永遠に故郷を失った。春には桜、秋には紅葉美しいと幼い日々聞かされ続けたニッポンには、四季の美しさはあっても国家の美しさはなく、五十年の歳月を重ねても、私にとってはまだ故郷ではない。永遠に失われてしまったふるさとの代わりにここに仮に宿っているという思いが、今も胸の中に深い。それでも五十余年、この国のみにくさを憤り続けて、それは抜きさしならぬ仲になっている。

願わくば愛せる国になってほしい。誇れる国になってほしい。できることなら、国は要らない。一つのコミュニティで

あっていい。世界県日本村。村境も県境もない。だから東に飢えた人がありと聞けば飛んで食べ物を届け、西に病む人があると知れば、走って薬を渡す。戦車の代わりに救助犬を飼う静かで穏やかな村。その時、私たちの人相も、もう少し柔らかくなるだろう。

＊

次から次へと浮かぶ灰色の連想の中で、たった一つ、光が射す思いがするのは、多くの神戸の市民たちが、「神戸は離れない」と宣言し、自分たちで生きる」と誓ったことだ。三十五万の「難民」は、ともかくも、ここに「根」がある。難民でなくなる日は近いだろう。

水も電気もガスもない中で、難民たちは自然に手をさしのべあった。政府よりも自治体よりも、一人ひとりの己れこそ、一人ひとりの他者こそ信じられることを知った。地方分権ではない、本来、「地方在権」なのだと知った。ここから本当の自治、本当の都市が生まれるだろう。

「一番絶望があるから一番希望がある」と布紀ちゃんが語った「長田」は、平家物語の昔からの衆落だ。そのゆえに差別され、だからこそ人びとは温かかった。半島の人も大陸の人もヴェトナムの人も受け入れた。人間の共生があったからこそ、創生の鎚音は長田から響き始めた。大災害は多くの日本人の目のウロコを落としたが、今も多くの人の目に貼りついている差別をかき落としかき消すのにもこれほどの好機はないだろう。がんばれ長田！がんばれ神戸！

来たくなかった町に来て、見たくなかったものを見、思い出したくなかった数々を五十年ぶりに思い出した。それもまた神の摂理なのかもしれない。神は〝経済成長〟の虚像を示すとともに、風化しようとする〝戦争〟の記憶も思い出させたのかもしれない。戦争の災害はどんな烈震よりも数百倍、数千倍も大きい。つらいことこそ、いやなことこそ、恥部を知ることこそ、忘れてはいけないのだ。忘れやすい日本人が、忘れやすい私が忘れないために、重いペンを執った。見てしまったこと、書いてしまったことの責任を私はとり続けなければなるまい。

（九五・一・三一）

AGORAZEIN

阪神大震災とわたし

桑原ちゑ子／黒岩佐和子／斎藤千代
しまようこ／竹崎　周子／田村伴子
寺崎しげ代／山本真美子

毎月一回の〈自立の心理学〉では、しまようこさんを囲んでそれぞれの生き方を考えています。現在は「女たちの変化の底で、しぶとく変わらない構造を見すえる」がテーマ。2月3日の例会は、それについて語り合う予定でしたが、久しぶりに顔を合わせて話は阪神大震災に集中。ちょうど阪神から帰った斎藤千代さんをまじえて自然発生的なAGORAZEINになりました。

斎藤　感想ですか……。テレビよりも新聞よりもはるかに厳しくて、ちょっと一言では言えない状況ですね。空襲を思い出して、とても疲れました。でも空襲よりはまだ救われると思いました。戦争と違って希望があるということ、死亡した人が少ないこと、全国から救援があるし情報が行き渡っていること。民衆が立ち上がった姿にも感動しました。へんな政府はいらないということがよくわかったと、みんなが言ってるのが一番の収穫ですね。

しま　以前に神戸新聞の記者をしていた友人が「神戸はハリボテの街だ」とよく言っていたんです。見栄だけよくして防災などは考えられていないということだと思うんですが、今回の惨事でその意味がよくわかりました。

斎藤　神戸はいくつかの地域に分かれ

てるんですね。六甲の名水から生まれた酒造りの灘五郷、漁港だったかんべ村、そして平清盛の頃から庶民の町として知られていた長田。あとはほとんど明治以降の町なんですね。だから港町として文明開化をどんどん取り入れることができて日本屈指のおしゃれな都市になった。その後、港と山の中間の沼や水田を埋め立てた住宅地が出来、よそからの人が、沼地だったとは知らず、そこに家や店を建てたんですね。今度一番被害の大きかった東灘区なんて、まさにその埋立地だったみたいです。さらに悪いことに70年代からは六甲の山を削って宅地を造成し、80年代には港に陸地まで造った。当時からあれはだいぶ問題になっていましたが、そこが今度は見事に液状化した。そういう意味では、新しいハリボテの部分が崩れた、ということになるのでしょうね。

ただ、同じ地域でも、こわれているのはハリボテ、つまり、十分な建築費をかけられなかった店と住宅です。ですから、とてもイヤな気持ちになりました。ふしぎなのは三宮で、銀行や生命保険のビルまでこわれている。

しま　活断層が走っていたからでしょう。

斎藤　あそこが震源地だという説も出たようですね。活断層なら真っすぐに一様にこわれると思うんですが、そうじゃないんです。こわれたのも全壊というより、途中の階だけつぶれたり、どういう力学が働いたのか、ほんとにふしぎでした。見た事について原稿を書いたんですが、書いている途中でもほんとにイヤな気がして、ますます疲れました。でも、市民運動をやっている人間、そしてジャーナリズムの末端につながる人間としては、やっぱり行くべきだった、行ってよかった、と今は思っています。

しま　気になるのは、先の話をしたら申しわけないんですけど、次の瞬間にまた日本のどこかで地震がおきるのは確実ですよね。もうほんとに恐怖です。

斎藤　島原・奥尻・釧路と大警告が続きながら聞きながしていた。次は東京か東海と思っていた人が多かったのに神戸が身代わりになったと、いまほとんどの日本人が感じてますね。今度の大震災を、我が身のこととして受けとめないと、きっと大変なことになるでしょうね。

しま　一月十七日は寝たのが午前五時でうつらうつらしていたら、ゆらゆらと揺れを感じたのですぐラジオをつけましたら、「少々お待ちください。ただいま関西の方で相当の地震

がおきました。少々お待ちください……」というアナウンス。まず、京都震度5が伝えられて、淡路島のことが報じられたのは六時すぎてからですね。

斎藤　私は六時の第一報を聞いて、それから死者が二百人と出たとき、そんな人数で済むわけはないと思った。

竹崎　それはどうしてですか。当初の報道からは私はまさか五千人以上の方が亡くなるなんて、逆に思いも寄らなかった。

斎藤　そのうち東京に大震災が……と思っていたからでしょう。神戸大学の浅井先生の「ベッドから転がり落ちかけた」という報告に、「これは…」と思った。朝の職場で「関東大地震クラスの阪神大震災が起きたみたい」とみんなに話しました。死者が多いと思ったのは、空襲の体験からでしょうね。東京の下町だけでも亡くなった人は十万人でしたから。

幸い、早朝のことだったのでまだ被害が少なかったとも言える。よく五千人に止まったという気持ちもあります。でも死ななかったから、負傷しなかったから、被災しなかったということではないんですね。あの地域に住んでいた人は、みんな多かれ少なかれ傷ついた。全員被災者だと思います。

竹崎　戦争中はみんな大変な生活に慣れてたと聞いてますが、毎日お風呂に入りエアコンのある生活から、突然の避難所の暮らしで同じ下着を着続ける生活になった。その落差に、特にお年寄りなどは耐えられないんじゃないかと思いました。

しま　事実、そういうことがおきている。「事実」なんですよね。

斎藤　初めのうちはみんな無欲になって「あぁ助かっただけでもよかった」という感じだったそうですが、家の建て替えとか具体的な問題が出てくるこれからが大変ですよね。

竹崎　家のローンなどがあれば、無からの出発どころか借金からの出発ですよね。私だったら、借金抱えてまた新たに家を建てるなんていう経済力も気力もないですね。

斎藤　でも個人にも国が金銭的な保障をしてくれるでしょうから。八兆円ぐらいの予算を組むようですよ。戦災者にも引揚げ者にもほとんど何の保障もなかったことを思うと、戦争よりはいいですね。

しま　どんなちっぽけな家でもね、防空壕よりはまし。いまの暮らしのまいこうなんていうのが間違いなんだから。

寺崎　でも、そんな記憶ないもの。私たち。

しま　記憶がなくても想像力がなくては。

斎藤　ただ救いだったのは、物価が高くならなくてむしろ安くなったということ。

しま　一時は白菜が八百円とか、一個千五百円のおにぎりが飛ぶように売れたとかはあったようですけど。

桑原　身近に六人ぐらい被災した方がいます。日系ブラジル人の姪が川西市で看護婦さんの下について働いていますが、その子がちょうど夜勤のときに地震がおきて、電気はすぐ消えて大騒ぎになったそうです。川西市はガスも水道も止まったけれど、亡くなった方は一名だったということでした。その子から日本人を見直したという手紙が来たんです。それは物価が上がらなかったということ。食べ物を買いにスーパーに行ったら、必要なものの値段がいつもより安くなっているのを見て、感動したという内容でした。

人災としての災害と考えたい

田村　私たちはたまたま被害にあわなかっただけだから、これから何をしていくのかが課せられていると思うのですけど、震災の最初の日に家や街が焼かれているテレビを見たときに、湾岸戦争を思い出したんです。私たちの目が知らず知らずのうちにテレビカメラの目になってしまっているのでは、とハッとしたのです。報道する側は絶対安全な側にいて撮っているわけですね。その映像を見ながら、「悲惨だ」「大変だ」と口では言いながら、「ああ東京でなくてよかったね」とどこかで思っている。そんな精神のありようが出来てしまっているのではないか、と。

いまは、被災者が気の毒という感じでボランティア活動をしたり、義援金を送ったりしていますけど、「自分たちには被害がなくてよかった」ではなく、自分たちの問題として何を考えるかをやっていかなくちゃいけないと思うんです。バブル時代の都市の乱開発とか、さっき「ハリボテ」という話もありましたが、神戸の人たちもそういうきらびやかな観光の街を望んで造ってきたという面があると思う。東京だってウォーターフロントをはじめ、高層ビルの建築などが当たり前のように進められている。経済を優先した一見快適で便利そうな社会を、積極的にも消極的にも受け入れてきた私たち自身の生き方が問われた気がしました。この地震をきっかけ

にして、私たちがこれから何をどう変えていくのか、何を選択していくのかが突きつけられている。報道では災害の悲惨さと復興への人間の力強さといったことばかりが取り上げられて、災害は人災だということに触れなすぎると思いました。

斎藤　日本人がいろんなことを考え直す大チャンスなのにね。

しま　いろいろなことを考え直す大きなチャンスですけど、ほんとうに大チャンスにできるのか。個人として頑張っても……という危機感がありますね。

斎藤　東京大空襲の後も、東京を大改造するチャンスだったのに見事に利権の街にしましたものね。

しま　現実離れした極端な言い方しかできないんだけど、神戸が復興しないうちに三つ四つ地震が来ないかぎり、残念ながら日本は変わらないんじゃないかとも思いますけど。でも、だからダメというのでは決してなくて、やれることはたくさんあります。

斎藤　はっきりいえば、倒れていたのは明らかに老朽家屋ですよ。一発でボンと潰れている。老朽と知りながら建て直せなかった人びとが傷ついた。建築工学、都市工学以前の社会学の問題ですからね。長田はわざと意図的に焼き払ったのだなんて、イヤなうわさが流れたりしてました。

しま　被害は意識の現実をあぶりだしていますよね。つまり、そういう意識を持たざるを得ない状況が潜在的にあったということでしょ。ところで市長はどういう人なんですか。投票率二〇％ぐらいで当選したということですが。

田村　自民党から共産党まで全部で推した人ですよね。投票率二〇％というのでは、市民がまるで地方自治に責任を持たないと言ってもいいほどですよね。

斎藤　前市長が五期二十年の宮崎さん。起債で六甲を削って宅地を造成し、「神戸市株式会社」と言われた都市経営の妙手。鋭い反対もあったけど、結局総与党化して支持する体制が出来たということですね。

田村　西宮在住で家族と共に被災した小田実さんが、毎日新聞に投稿していたんですけど、各テレビ局のキャスターを名指しで批判していました。自分たちは安全な場所にいて報道している姿勢というのは何だ。最初は建物がこれだけ壊れているとか、東京で地震が起きたらどうするとか、モノの被害の方を大きく取り沙汰した報道だけだった。そういう人間をモノ化して、モノに付随してあるような、そして、人間より

もモノのほうが大事だといわんばかりの報道を激しく怒っていました。地震直後に、「どうして高速道路が壊れたのか」など論じるよりも、その時点で、生き埋めにされているたくさんの人の、その人命救助をどうするかの方が先だろうと。けれど地震の被害の大きさも報道のひどさも、今まで私たちの社会が何を最も優先してきたかがあぶりだされたということなのでしょうね。

自衛隊強化は絶対許せない

寺崎　自衛隊が問題になってますね。

斎藤　自衛隊は午前八時には二百人来たんですって。でも、役に立つ道具を持っていなかった。ふだん、人を助ける訓練なんてそれほどしていない。戦争、つまり人を殺すことを第一に訓練してるんですもの、ムリですよ。

戦争中だって空襲で火事がおきたりすると、火消しが使う〝とびぐち〟を持った人たちがわっと駆けつけて、延焼を防ぐために周りの家を壊したり、中にいる人を助け出したりしたもんですよ。一台何億円もする戦車でなく、ブルドーザーでもリフトでも持っていてほしかった。「有事」の想定が根源的に間違っている。

しま　いろんな人と協力して、女性の視点からの問題をちゃんと提起したいですね。

斎藤　〈私たちの提言〉というグループが三月三十日にその集会をします。〈あごら〉では〈あごら大阪〉が中心になって、阪神大震災をめぐる特集を出すことにしました。全国の人たちで、今回の災害でどんなことを問題だととらえたか、どんなことを学んだかなどについて報告し合うことが大事だと思うので、緊急特集号のあとも、ぜひ投稿していただきたいと思います。いま自衛隊法の八三条を変えようという動きがあるので、民衆の方で先に声を出してつぶさなくては……。

しま　そのへんがすごく微妙なんですね。今回のことで、自衛隊に対する国民の期待というのがはっきりした面もあると思うのです。自衛隊さえ早く到着して助けてくれれば、たくさんの命が救われたのに……というような。

斎藤　でも救助を専門に訓練された人でなければムリだと思いますよ。今度はボランティアが大活躍しましたけど、それは海外に行ったり、国内でも弱い立場の人を助ける、つまり

人にやさしくすることを日常にしていた人たちなんです。

しま　だから、そういう災害救助などへの期待と、いまなされようとしている自衛隊の増強との意味の違い、自分たちを助けてくれるための自衛隊の強化ではないんだということをはっきりさせていかなければならないと思います。

斎藤　自衛隊を少なくとも半数は全く別の組織、災害救援隊に改め、米軍の基地は撤収してもらうというように大転換しなければダメですね。そのことを民衆の側から繰り返し強烈に提起しないと、「やっぱり自衛隊が必要」にすり変えられますよ。今の自衛隊は「税金ドロボー」と言われて、隊員もつらい思いをしている。気の毒です。

しま　「戒厳令」なんてことばが出たりして、怖いですね。

田村　今回の災害では、車が渋滞し道路が機能しなかったということがありますよね。個人の車よりも救援のための車が優先されるのがあたりまえだと思うけど、そういう一人ひとりのあたりまえの倫理が働かないようになっているでしょう。それなのに、極端に「戒厳令」を言い出す。そこのところをよく考えていかないと、よけい危ない方向に制度化がなされていくように思えるのですけど……。

しま　都市では、もう車を個人の自由意志に任せるには限界まで来ていますよね。新しい都市構想では、個人の車は持ち込ませないというぐらいの措置が必要ですね。

現代科学の神話が崩れた

田村　このところ奥尻島とか三陸はるか沖とか釧路とか、地震が続きましたよね。そこでも大きい被害があったのに、今回とは全然関心度・扱い方が違います。もちろん、被害の大きさがケタはずれに違うからだけど、やっぱり神戸という大都市だから、マスコミの取り上げ方・情報量も私たち自身のとらえ方も違ってくるのかなと、地方と都市、農村と都市といったようなとらえ方の差も感じますね。

斎藤　過信していたテクノロジーの破壊、そのもろさを見せつけられたという意味で、神戸が騒がれているではないかと思う。明日はわが身だから。

竹崎　何百世帯も入っている高層マンションの一部が壊れたために、住民がすべて避難するというようなことは都市でないとおこらない。ポートアイランドの高層マンションでもラ

イフラインが止まって、水を汲みに何十階も昇り降りすると
いう状況があったり。近代化し、科学が発達することをよし
としてそれを享受し、信頼していたものが神話だったという
ショックですよ。

去年の夏、ポートアイランドを見て廻る機会があったんで
すが、科学の枠を集めた建築群が、実は文字通り砂上の楼閣
だったと思うとねえ。科学の進歩こそ人類の幸せのように思
っている人がほとんどでしょ。

斎藤　奥尻や釧路の災害には人間の傲慢さに対する警鐘とい
うイメージはあまりなかった。今度は私たちの代わりに神戸
がやられたとか、明日は我が身かと受けとめられたのでは。

田村　それはあると思います。それと、やっぱり経済優先で
ここまで来たという問題。先ほどのポートアイランドのこと
ですが、埋め立て地の液状化を防ぐ工法をすると、コストの
点で一立法メートル当たり十倍の費用がかかると新聞に出て
いました。あと、『サンデー毎日』で読んだのですが、都内
の高速道路にしても落橋の可能性はとっくに織り込み済みだ
というんです。首都圏高速道路の通行能力の導通確率という
のだそうですが、何パーセント落橋の可能性があるかという
算定が前もってなされている。しかもそれが五割程度なんで
すって。そうした発言を、東京都の職員がしているという記
事に、ほんとにびっくりして……。

それから、災害の当日のテレビ番組での、土木建築の専門
家の話に心底怒りを感じたのですが、「考えうる地震に対し
て、それに耐えうる建築をするのは不経済だ。百年に一度の
ことに、そんなにお金をかけられない」って言うんです。

斎藤　人体実験していい、っていう発想ですね。ヒドイ…！

一同　それが「経済の原則」なんですね。

斎藤　官公立の工事の裏取引きの問題や建築設計上の問題も
あるんじゃないですか。一本足の高速道路はひっくり返った
けれど、道路の下に店舗が造られている部分は無事でしたよ。
下の店舗も、ひびは入っていたけど無事でした。土地の有効
利用という意味でも、高速道路の下が空き地になっているの
は常々もったいないと思っていたけど。

ちょっと知恵を働かせれば、シロウトでもこうしたほうが
いいなとわかるものが世の中にはたくさんある。本来、日本
人には生活を豊かにするすぐれた知恵がたくさんあったは
ず。それを「民衆は口出しするな」みたいな形で封じられて、

一見、便利な生活の中でどんどん忘れてきてしまっている。

しま　どのへんから変わったか、考える必要がある。

竹崎　震災の後、少しだけどデパートの売上げが減ったそうよ。一瞬にして物がガラクタになるというのを目の当たりにして、買控えしたのでは。

斎藤　物質に頼るむなしさがみんな身に泌みたと思う。一挙にすべてが失われる。

竹崎　それにしても、今はどの家でも家財道具の量がすごいですよね。

斎藤　経済学者の試算によると、日本人は生鮮食料品以外は、平均して六年間は何も買わなくても生活できるんですって。学校のコンクリートの上や板の上に寝ている人も多いので、せめて押入れの奥の布団を畳の代わりに各家庭で一枚ずつでも送りたいと思いました。物が余ってさばききれないという話だけど、私が行った避難所ではどんなものでも欲しいと言ってました。何が必要か、口コミ情報をきちんと集めて伝え合うことがまず重要ですね。

しま　水の情報にしても、ラジオを持っていない人は、その地域に給水車がいつ来るのかもぜんぜん分からないということを聞きました。

斎藤　避難所で物を配給していても、耳が聞こえない人に周りが教えないとか、目の不自由な人が困るとか、やはり弱者が疎外される。そういう中で、避難民の要求をとりまとめて積極的に行政とかけあい、みんなの不満を静めているすばらしいリーダーもいると聞きました。その一方で善意の押し売りのようなボランティアにすごく悩まされるとも聞きました。

島原の時も中古品がたくさん送られてきて、現地の人がいやがったという話がある。知らない人の洗濯されてないものが送られてきたら、侮辱されたと思うでしょうね。

傍観者になってしまいそうで、私は現地で人を写すことがどうしてもできなかったけど、アマチュア写真家とおぼしき中高年の男性が何人もいて、瓦礫の中でカメラやビデオを撮りまくっていた。撮られる側の気持ちはどんなでしょうね。

その一方で、温かな心にもたくさん出会いました。石井布紀子さんの活動など、ただ感激しました。以前から大阪の人に政治の話をすると、「私たちはもともとお上（かみ）なんて信じてないから、どうなろうと影響はない」って、よく言

われたけど、そういう町衆の伝統が今回感じられて、上方の人はりっぱだな、と感動しました。

どんな形の援助がよいのか、私たちはまさに今、試されていると思いますね。お金がいいとは思うけど、どこへ送ればいいのか、どんなかたちで届くのか、はっきりしないことが多い。募金をとりまとめた団体に一割から二割が還元されるという仕組みも聞いたし、じっくり構えて本当に必要と判断したところに持続的に援助していくことが大事だと思う。外国人労働者のように日本に血縁のない人に重点的に贈るとか。

しま　偽名を使って働いている人などは亡くなってもわからない状況ですよね。ひとり暮らしの老人とか家出人もね。

被災の中に見えた〝家族制度〟

田村　こんどの震災で、やはり男性社会だということがはっきりしたという話がありましたが、内容を詳しく……。

しま　神戸新聞の記者で、〝女性だから家庭欄〟という形でずっと働かされてきたという不満を持っている友人が言っていたんです。男たちは勝手だと。例えば、男たちは「家族のため」といって給水車の所にたくさんポリタンクを持ってくるわけ。その人たちが時間をとり、自分たちはやっと捜し当てた給水場所で長々と待たされる。一方一緒に並んでいるおばあさんはやかん一つの水を運ぶのがやっとなのだ、という話。なんでそんなことが問題なのかと思うでしょうが、いわゆる〝家族賃金〟という考え方が男性の行動のすべてにしみ込んでその行動を正当化していくという実態が見えてくる。「おとうさん、水たくさん汲んできて」「たくさん給料持ってきて」という女たちを抱えて。

斎藤　毎日新聞の記者がおもしろいことを書いてます。「避難所から男たちは仕事に出掛けていき、女たちは被災地で水汲みやかたづけなどの重労働をしている」と。

田村　今度、援助金が出ることになりましたよね。「全半壊した家、または死亡者が出た家の世帯主にでる」となっているけど、中には家族という形態をとっていなかったりいろいろな場合があると思うので、一律に世帯主（イコール男性といえる）を対象にするのはどうかと思ったのですが…。

竹崎　住民票の筆頭者が世帯主でしょ。だったら一人暮らし

の人でも世帯主になるわけで、戸主とは違うのでは。

しま　実際には、機能的なラベルとして使われている面もあるけど、人々の意識の中では戸主と同じような意味合いで根づいている問題がある。

行政は世帯主という言葉を無意識に使いすぎている。世帯主はかつての戸主をいい替えた言葉だけど、行政は単なる「索引のラベル」だといって逃げている。法律婚による家族単位が基本になっているという問題。

斎藤　そういう援助金が出て、日本軍「慰安婦」へは個人補償が出ないという問題もあるし。水俣も四十年たつのに国家補償していない。

田村「慰安婦」に対しては震災で費用がかかるので、政府の支出をますます少なくして、民間に出してもらおうとする動きが強まるということですが……。

斎藤　死亡者の弔慰金も避難所に行ってから亡くなった人は出ないそうだし、奥尻の時はなかったという声もある。今生きている人の救済を優先し、まず仮設住宅の設置など、もっともっと早急にやってほしいと思う。失業保険も零細企業で働いてきた人には出ないし、職を失った中高年の人も多い。

竹崎　いまはお年寄りが長生きするのが当たり前になっていてあまり死を考えることがなくなった。けれど、今度のことで人間がほんとにあっけなく死んでしまうというのを改めて思い知らされて、そういう意味でもショックだった。

斎藤　人は死ぬもの、国は滅びるものなのに、いつのまにか忘れていた。私は今度『平家物語』を思い浮かべた。『平家』は日本で一番の大ベストセラーだと思うけど、語り継がれて「盛者必衰、会者定離」と私たちを戒め続けてきたのに、長寿社会の幻想の中で忘れていた。地球だって滅びるのに。

しま　何百年単位で先を考えると、日本がいったいどういう位置にいるのかはまったく想像がつかないのに……。

復興に住民の声を

しま　これからの復興計画をよほど監視しないと……。例えば長田区というのは地理的にはとてもいい場所だそうですね。ですから、政府としては行政主導でやりたいんじゃないかと。でも、そんなことをさせたら元も子もない。住民がどれくらい具体的な計画作りに参加できるのかがほんとに心配

です。

これから復興への具体案が出されてくるでしょうが、それに対して女たちが、さまざまな場面でどれぐらいのパワーを持って発言していけるか、そこが長い目で見ると一番重要なことではないかと思うんです。それには、早いうちからの準備が必要ですよね。

斎藤 それがほんとに大事ですね。官僚制度を崩すくらいの意気込みで長期的な展望をきちんと出したいですね。緊急に必要なこととしては、まず今度の予算案を全部洗いなおしてもらいたい（同意の声）。政党助成金や自衛隊費とか米軍への思いやり予算とか見直す大きなチャンスなので、来年度の予算の組み替えをがんがん発言していくといいと思う。

しま たくさんの犠牲者の方々に報いるためにも、今度のことを通して日本の政治や経済のあり方を変えるきっかけになるように動きをつくっていくことが大切ですよね。たまたま阪神で起こった地震だけれども、関東でもワシントンでもどこでも天災の起きる可能性はあるということを想定して、今後を見据えていかないと。

サンフランシスコで地震があった時に、ミシガン州にいたのですけど、現地の新聞の取扱いは、送ってもらった日本の新聞よりもずっと小さかったのでびっくりしました。情報もあまり入ってこなかったので友人に尋ねたところ「これは自分の推測だけれど、地震がワシントンやニューヨーク、シカゴといった大都市で起こったならビッグニュースだが、サンフランシスコは東洋人も多く、純粋なアメリカという感じでとらえられていないので、マスコミの扱いをはじめとして差別的な対応になってくるのだ」という話をしていました。

ともかく大事なことは、女たちが今回のこの教訓を持続して、本気で未来への準備のプランにつなげて、女は抽象論が苦手だなどという偏見をはねのけて、きちんとやっていくことが必要だと思う。こういった惨事が日本だけではないと仮定した場合、地球人としてどういうふうに政治の舵を取っていくのか、共同の仕方をどう描けるのか、そういうことを男たちと共に考え始めなければと思う。

斎藤 それなのに残念ながら男たちがまず考えるのは、自衛隊の増強とか非常に短絡的なことですよ。女の人の方がずっと長期展望まで考えている。

災害への村山内閣の対応に非難が集中してますが、今度の

人災は、言ってみれば敗戦後五十年間の政治のツケだということでしょう。これまで政治の中枢にいた人たちが責められるべきなのに、そういう人たちが野党に回って居丈高に村山さんを追求するのを見ていると、腹が立ちますね。そうした政治のあり方・政府を許してきた私たちも責を負うべきだし、何に税金が使われるのかに対して、賛否を明らかにしていく行動をもっと公然と展開していくことが必要だと思う。

しま　軍事費を削れば、復興はずいぶんスムーズに行くでしょうしね。

田村　これまでの政治や経済のあり方を放置し、なおかつ認めてきた自分たち自身にどう刃をつきつけるかということをしないといけないですね。壊れたものをともかく直さなくちゃという目先のことだけだと、前よりも良くないものができていくように思うから、その対応を政府も市民もきちっとしていくことが大事だと思います。

斎藤　私たちは政治を変えることはできない、山は崩せないとか、ここ五、六年は特に自分の無力さを感じて、ある程度あきらめていた面があったけど、もっと他に何かできることがあったのではないかと、いましみじみ思ってます。

しまさんはいつも〝言葉には力があるはずだ〟とおっしゃいますね。私たちはそれをどこまで実行していたかと後悔しています。点検する材料は山ほどあるのにどれほどとりこぼしてきたか……。やはりどこかで放棄していたなとつくづく思いますね。

しま　放棄というより、疲れて休んでいたということじゃないですか。安保からまだたった三十年ですから。

斎藤　だからこそ、いまこの時が自分自身を変え、状況を変えるチャンスだと言えますね。ほんとに戦車がいるのかと突きつけ、投書を何度も繰り返すのも効果がある。三〇通投書が届けば新聞は必ず載せるそうですし、ともかく、まず予算案を全面刷新するような動きを作らないと。

しま　いま杭を一本打っておかないと。

竹崎　地震特需なんてあるんでしょうか。

斎藤　建設業界をはじめ、儲けに対してはみんな鋭敏ですよ。関東大震災の後もいろいろ問題があったようですね。〝復興需要〟を、政府も財界も期待していますが、このへんをよほど注意しないと。

しま　外国から売り込みに来ていると日経新聞に出てました

ね、水を濾過する装置の値が上がったとか。造らなくてもいいものがどんどん造られてきた、あの二の舞はしないように。

いのちを大切にする都市づくりを

田村　私たちみんなの問題として、都市をどうするかということを考えたい。時間の単位を千年単位くらいでとらえて、生き延びることのできる都市を具体的にどうつくっていくか。経済や効率が基になる都市ではなく、モノよりいのちのほうが大事なんだという私たちが理想とする都市を形として提案することはできるのではないかと思います。

しま　施設を地方に分散させる企業も増えてきているけど、例えば人口一三〇〇万の東京のように、一極集中の過密都市がある限り、とんでもない大災害になることはわかっているわけだから、これを分散するとか、いろいろな形でアイディアを提案することはできますよね。

斎藤　東京の遷都という話もありますが、機能分散はいやおうなしに進むんじゃないですか。コンピュータが動かなくなって、各企業も真剣に分散を考え始めたし。

バブルがはじけたために、東京都のウォーターフロント開発が遅れたのは不幸中の大幸いでしたね。ついでに世界都市博の開催もやめにして、その予算を老朽家屋の建て替えの援助や道路の整備などにまわしてほしい。

この機会に、そもそも都市とは何かという、都市の発生の原点に返って考えることが必要ではないですか。

竹崎　企業の分散化といわれているけど、もともと大阪で興った大企業の本社なんかが東京に移ってきていて、大阪の商工会議所はこれからジリ貧だといわれているという話も聞きました。マルチメディアで会議をするといっても、電気が切れたら役に立たない。

しま　私は皇居が北海道に移ればいいと思っているんですけど、皇居がなくなったら、東京はずいぶん変わりますよ。

もし東京で大震災が起きたら、皇居を避難場所にするでしょうね。

斎藤　すると思います。ついでにみんなで住みついちゃおうか（笑）。新宿御苑も、戦争中は立入り禁止でしたけど、今は入れると思いますね。神戸で感心したのは、街路樹が一本も倒れていないこと。木はほんとに大切だと思いましたね。

しま 根っこがあるのでね……。なるほど。
斎藤 プレハブは大丈夫だという説が流れたけど、やっぱりチャチなのはだめでした。屋根瓦原因説も流布されたけど、そんなに簡単に言えるのか。膨大な実例をきっちり分析しないとわからないと思います。でないと、この機会に瓦屋根はやめましょうなどと、サギ師が横行することになるのでは。
山本 マスコミのヘリコプターがたくさん飛んできて、その振動で壁がこわされたりしたそうですよね。
しま 助けを呼ぶ声も、ヘリコプターの音で消されてわからなくなったという話も聞きました。マスコミも各社が全部現地へ行って報道していましたけど、おかしいですよね。共同してやるべきですよね。地区別に分担するとか。
斎藤 そういう中で感心したことがいくつかありました。阪急のネームをつけた路線バスが名鉄バスだったり、同業で本来なら競合するところが支援体制をボーダレスでやってましたね。社屋が壊れた神戸新聞に京都新聞が協力して、京都新聞社が受け取った原稿を徹夜で印刷して、神戸新聞は災害以降一日も休むことなく新聞を発行しつづけているとか、神戸新聞社のコンピューターシステムが壊れたのを、報道機関の情報システムに穴があいたらいけないということで、メーカーが二百人もの技術者を送って三日で直したとか、報道されてはいないけど民間のいろいろな連携が、回復を早くしていると実感しました。そのことを考えると、何でマスコミだけがあんな風に手柄を争うのかと残念でしたね。
田村 いったい何のための報道なのかということをすごく考えさせられます。新聞に現地の方の声が載っていて、それには「例えばこの地区ではこの状況、この地域ではこうだという具合に順を追って被害状況を映してもらえばまだ全体の状況が分かったと思うけど、どこを映しているのかもよくわからない内容で、レポーターが〝燃えています、燃えています〟とただ煽り立てるだけだ、これじゃ報道にならないとすごく怒っている」とありました。（同感の声、声）
桑原 地元のことがわからない人たちが取材に行くから…。
田村 特にテレビの論理で、まず「絵になる場面を撮れ」というのがあるから、燃えている場所とか悲惨な状況をトピックスとして流している。でも、そういう映し方だけで報道といえるのかという批判はずいぶん出ましたね。
斎藤 実際に現地に行ってみて、その悲惨さはテレビで観て

いる比ではない、テレビが強調しすぎたわけではない、と感じましたけど、まず人命救助に役立つ報道をしてもらいたかったですね。報道のヘリは各社共用の一機くらいにして、救援体制のためのヘリに飛んでもらいたかった。どの地区でどういう人が被災したかを知らせる体制もない。例えば、特定の避難所が何回も出たけども、各地区の避難所の名簿も公開してもらえれば……と、その度に思いました。死亡者のリストも、アイウエオ順ではないし、探しにくかった。ワープロで打つんだから、順序立てることはできたと思うけど。

竹崎　でも、避難所でも当初はそういう名簿を作るような人手もなかったんじゃないかしら。

斎藤　名簿は物質の配給のこともあるし、真っ先につくったろうと思います。「名前と住所を書けば避難所に入れる」と広報してましたからね。

しま　そのあたりは関東大震災の時とは違う、何かが最少限ありますね。

斎藤　多分、関東大震災と空襲の教訓でしょうね。中年の女性に話しかけられました。「母が、空襲のことを思えば、どんな暮らしにも耐えられる。必ず再建できると言ってます」と。

しま　ちょっとしたことでも語り継いでいくことが大事ですよね。母親が関東大震災にあっていて、その話を子どものときから聞いているので、家ではバケツややかんには常に水が入っています。日常の生活の中で人から伝えられたことは身についていきますね。

斎藤　この間から、各局で災害対策の方法をスポットで流してますが、役に立つものがいっぱいありました。例えば水道水が一か月は絶対腐らない保存方法を知らせていました。まず容器に水をあふれるほど入れてから蓋をして、黒いビニール袋をかぶせて遮光すれば大丈夫だそうです。それをガレージとか取り出しやすい所に分散して置いておけばいい、と。

逃げる時は必ず両腕で顔を覆うんですって。今度もガラスの破片がブーメランのように回転して飛び散ったりしたそうだけど、たとえやられても被害がずいぶん違うということでした。ふとんにくるまっていた人は助かったみたいですよ。

しま　靴やスリッパはガラスの破片などが入らないようにひっくり返して置いておくといいんですって。

一同　なるほどねー。

竹崎　ひところ地震対策のことがいろいろ取り沙汰されてい

たときは、私も乾パンとか宇宙食とか防空頭巾なんかも買ったんですけど、今は押入れの奥の方に入ってしまっている。日常取り出しやすいところに置いておくと、じゃまっけでしょう。

斎藤　食べなくっても一週間はもちますよ。すぐ必要なのは懐中電灯とかラジオとか水みたいですね。蛍光時計が懐中電灯の代わりになって助かったという話も聞きました。

寺崎　首から笛をつるして寝ようかという話をしています。助けを求めても声じゃ通らないけれど、笛なら聞こえるんじゃないかと……。

斎藤　ふだんから家族でコミュニケーションをとって、何かあったらここへ集まろうとか、どこそこへ連絡し合おうと話し合っておくことも大事ですね。

山本　ビルの〝出し看板〟というんですか。あれはもっと小さい地震でもバラバラっと落ちてきて恐ろしい凶器になるので、取り外すべきですよね。

斎藤　ほんとに、あれこそ規制するといい。タンスも、L字金具でぴっちり固定しないと危ない。

しま　亡くならないまでも、大ケガをして苦しんでいる人がたくさんいますよね。そういう方々の大変さがなぜ報道されないのかと。

斎藤　目にも鼻にも口にも粉じんがいっぱいつまった、言語に絶する状況の人もいたようですよ。クラッシュ症候群といって、押しつぶされた人は一見無症状のようでも血液に変化が起き、手当てが遅れて亡くなった方も多かったとか。テレビで、お医者さんが、「これもひどい」「これも……」とつぶやきながら、とうとう何日も徹夜している姿を見ましたけど、休もうにも休めなかったみたい。それと持病を持っていた人で薬がなくなったり、人工透析ができなかったり。負傷者が二万何千人という事実を、もっと重く考えたいですね。〝避難所病〟も発生するでしょうし、報道は、ぜひそこにも重点を置いてほしい。

田村　生きてはいるけど大変な人たちのことをなぜ報道しないのかと考えていたんですけど、やっぱり報道する側に「生きている人をどうすれば助けられるか」の視点がないということなんですよね。

しま　生きている人に対してどう対応していこうか、という姿勢ですよね……。

竹崎　生き埋めになった経験なんかしたら、助かってもずうっとうなされるわね。

斎藤　と思うの。だからさっき言ったように、生き残った人も、一見無事だった人も、被災者だと……。

ほんとうの意味で助けるということ

田村　そういう意味では、ボランティアなどの救援活動や手助けを続けることが大切だと思うんです。いまボランティア活動している人も疲れてくると思うし、リレー式にやっていくという体制をどうやってつくっていくか、行きたいと思いながら動けなかっただけに、考えていきたいです。

斎藤　西宮の石井さんのところなどがいい活動ができたのは、市民運動のネットワークができていたから。集まった人たちが活動の仕方に慣れていて、共通のコアのようなものでつながっていたということがあるんですね。何を大事にするかがお互いわかりあっているので、あ・うんの呼吸で働ける。

石井さんを訪ねて、何か手伝えるかなと思ったけど、私は手伝えないと思った。大阪弁で話すからそれで向こうも安心する。微妙なニュアンスを汲み取りあっている。自分が出る幕ではないとわかりました。

彼女がとても自負していたのは、何々という地名と番地を聞くと、そこにどんな人が住んでいて、どんなものが必要だろうと、パッと浮かぶということ。細かい路地の抜け道もよく知っているということ。現地で、各地から応援に来ているおまわりさんに路を聞いても全然わからなかったのと対照的でした。おまわりさんも、関西弁しゃべれる人を派遣するといいいな、って思いました。

しま　そこまでふだんから計画しておくってことね。

斎藤　自衛隊は米軍と合同演習をするけど、救援というのが任務のなかに入っているのなら、なぜふだんから自治体の職員や警察と演習をしないのか。自衛隊の中に救援の任務を入れるのでなく、自衛隊の一部を専門の救援隊に改めないとダメですね。自治体職員は家が焼けたり、家族が病気だったりしているのに、死にものぐるいで働いている。ふだんから救援隊とタイアップしていたらな、と気の毒でしたね。

感心したのは、女の人たちの連帯。例えば神戸ＹＷＣＡは潰れなかったので、そこを救援センターにして大阪と京都の

ＹＷＣＡが駆けつけて、いい活動をしているんですよね。どこでも、女から女へのネットワークがすごく機能してたし、立ち上がりが早かった。高山の岡田さんなんか、十トントラックで二台も、間髪を入れず救援物資を送っている。女の人が送る時は、化粧水とかリップクリームとか、ウエットティッシュとか、心くばりが違うんですね。女社長の東京のあまき印刷は、二トントラックに発電機と印刷機を積んで行って現地でミニコミを発行、すごく喜ばれています。

しま　持続的なボランティアはこれから〈あごら〉を通していろいろやっていけるんでしょう。

斎藤　準備中の〈あごら阪神〉が出来ていて〈あごら大阪〉と〈あごら京都〉間のような交流が普段からあったら、初動体制ももっとスムーズに行ったのに、と残念でしたけど、これからは〈大阪〉が中心になって、状況を正確に把握しながら、気長な支援を続けることになっています。この号の売上もカンパに回しますので、一冊でも二冊でも余分に買ってください。女から女たちへ細かいネットワークを張りめぐらして、キメ細かな支援を続けていきたい。

しま　そのことと、先ほどから出ている大風呂敷の展望とね。その二つの面からやっていくということを今日は確認したいと思います。

桑原　私の会社の役員の自宅が神戸にあって、たまたま帰っていたときに災害にあったんです。普段からボランティア活動をしている人だったので、すぐ自宅をボランティア活動のセンターとして開放して動きだしたそうです。そこから、郵便小包も局止めにすると届くので、卓上コンロを送ってほしいという連絡が地震の当日にあったので会社として送りました。労働組合としても、水や必要なものを、その役員がつくった救援センターに車で届けたりという活動をしました。

山本　年配の人から、「あなたぐらいの年齢の人にはライフラインが止まった状況はわからないでしょうね」と言われたんですけど、水と電気のない生活をしたことがないのでほんとうに想像できないんですよね。どうしても人ごとになってしまうのをどういうふうにつなげたらいいのかわからない。だから、やる気はあってもどう援助したらいいのか分からないというのがある。

仕事場は精神遅滞の人の作業所ですが、そこの人たちがなにかできることをやろうと、自分たちで義援金の箱を作りま

した。貴重な一円や十円がたくさん集まっています。

寺崎　今回の地震については、東京で地震が来たらどうしようぐらいにしか考えていなかったんですけど、新聞で〝精神的なケアが必要だ〟という記事を読んで「そうなんだ！」と思って、そうした面の救援活動はどうなっているのかと心配しました。

黒岩　将来的な展望とかいうことより、わが子三人がどう生き延びるか、そして、自分自身も生き延びたいという気持ちがすごくあるんだというのを切実に感じました。それから、わりと浮かれて生きていると思っていたけど、実際は不安と背中合わせに生きているなということを改めて感じました。

斎藤　淡路島で生き残った方のテレビを見たんですけど「極限状況の中で、やっぱり身内から先に助けてしまった。そのため助けられなかった何人かが出た」と、とても正直に話しておられた。多分、それが人間の自然で、そのことを責められない。ああ、一人暮らしのお年よりは……と、胸がふさがったけど……。

しま　そのことを意識して、どういう体制をつくっておくかが大事なんですね。

斎藤　それなのにボランティア活動に対する官僚の統制がすごくきびしいそうです。ボランティア活動を始めようとすると、市や区が、ボランティアをしたいなら、まず登録しろというんだそうです。ふだん計画を立てていないから、不安になるんでしょうね。

桑原　自衛隊との共同訓練の前に、行政と市民の共同訓練がまず必要なんですね。

斎藤　今回のことで、政治家と官僚がいなくなったら日本はほんとによくなるんじゃないかということを、みんながかなり実感したみたいね。その一方で自治体と市民は、ケンカしながらも、「他人」から「知人」になった。今度の災害のおかげで、水が流れるようなボランティア組織もどんどんつくられた。そういう自治が、これからの都市の核になるのでは、という予感がします。

それにしても、これから何年か、仕事は山ほどありますね。湾岸戦争の一年後にイラクを再訪した時、お年寄りの精神障害が増えたというのをずいぶん聞きました。人間の恐怖の結果でしょうね。今度の大地震でもいろいろな後遺症が出ています。私たちの仕事はまさにこれからが本番ですね。

Topics

労組のない女性の団結を！
〈女性ユニオン・東京〉結成

解雇におびえている……契約更新されなかった……職場でいやがらせを受けている……正社員から契約社員にさせられた……社会保険や雇用保険に入りたい……セクハラで悩んでいる……。

零細中小企業で働き、こんな不安を抱えている女性たちの応援団、〈女性ユニオン・東京〉が、3月19日（日）1時半から神田パンセで結成大会を開きます。三時からは中野麻美弁護士の講演、コーヒーブレイクや交流も企画しています。

〈女性ユニオン・東京〉は、全労協全国一般東京労組、個人加盟の労働組合。組合費は一か月二千円です。

申し込みは、東京都板橋区板橋1-16-2女性ユニオン・東京。TEL 03-3963-2715へ。なお、愛称とロゴマークも募集中です。ステキなアイディアを、どうぞ。

〈アジアの女たちの会〉が国際シンポジウム

〈アジアの女たちの会〉が、3月18日―21日、フィリピン、タイ、インドネシア、中国の女性研究者を招いて「日本のODAとアジア女性」のシンポジウムとワークショップを開きます。お問い合わせ・お申し込みはアジアの女たちの会（〒150 東京都渋谷区桜丘14-10-211、TEL 03-3780-5245、FAX 03-3463-9752）。

〈ピースおおさか〉が戦後五十周年記念事業

◇2月7日（火）～4月23日（日）
「戦争は、韓国・朝鮮でどのように伝えられているか（世界平和ミュージアム交流展――韓国・朝鮮編）」
◇3月12日（日）「3・13大阪大空襲」「証言・大阪大空襲」ほか。ピースおおさか TEL 06-947-7208。

阪神大震災と女性記者

竹村登茂子

（読売新聞大阪本社・社会部記者）

「お前らマスコミは現実も知らずに勝手なことばかりしてやがるんだよ」

阪神大震災は、文字通り「驚天動地」、いろんなものをひっくり返した。その、ひっくり返った中での取材で、ある日、こんな言葉を承った。避難所で、震災以来、三週間以上もおふろの情報がなくて行けないおばあさんに会い、なんとかできないかとボランティアの青年に尋ねた時に返って来た返事だ。「お前」といわれる筋合いの無い私は、その、それまで見聞きしてきたボランティアの美談にほど遠い返事に耳を疑った。で当然、喧嘩をすることに相成ったが、この言葉は、不思議な感慨も与えてくれた。これまで男性から反論を聞く時に、最も多く耳にしたのが「女のくせに」だったのに、「女」の言葉をこの震災取材では、ほとんど聞かなかったからだ。

大事件、大事故になればなるほど、男社会の色濃い新聞社では、男性記者が前線に出る。湾岸戦争でアメリカの女性記者たちが勇猛果敢に現地からリポートを送る姿を目にしながら、現実にあの戦争で女性記者を現地に送った日本の報道機関はごくわずか。いつまでたっても前線は男の世界であり、成果を出すのも男性が多かった。

それがこの震災では一転した。私の会社でも、神戸に住むある女性記者は男性記者よりも先に、半壊した自宅の片付けもそこそこに神戸総局にかけつけ、ずっと現地で取材に当たっている。写真部のカメラウーマンは、ヘリに乗り、現地に入り、あちこちから悲惨な写真を送ってくる。もちろん「危ない」という大義名分の下に、〈女性より男性を〉という無言の勢力は今回もあったと思うけれど、現実の前には男も女もなかった。ここも「ひっくり返った」ようなのだ。

この震災の取材の中で、心にささった言葉の一つが、「なんのために働いてきたのか」という男性たちの声だ。家族のために働き、やっとマイホームを手に入れ、それを払い終わらない内に、その夢が跡形も無くなり、ローンだけが残る。その、やり切れない現実に打ちのめされている人にどんな言葉をかければいいのか、私には言葉が見つからなかった。と同時に、働く女性が増え、女性も自分の「家」を手にする時代が広まった時、女性たちも「何のために働いてきたのか」というのだろうか。そんな問いがふと心に浮かんだ。

そんないろんな視点を与えてくれる今回の震災報道は、だれもが走りながら考えている状態だと思う。だからこそ、いろんなことを書き留めて、間違いも含めて残しておかねばならない。それが「男」だけの視点では、やはり困ると思うのだ。

十数年前に入社して以来、ひたすら「女も現場に」と思ってきた。先輩の女性記者たちもそれを求め続け、後輩の女性記者たちもそう訴え続けている。そういわねばならない状態は最近まであまり変わっていないかもしれない。けれどこの震災で何かが少し、動いてきたように思う。男やら女やらの両方をきちんと見渡し、通り超した視点でしか本当のことは伝えられないことを、この震災は見せつけたと思うからだ。幸せも、恐怖も、勇気も、努力も、男女の差なく存在するものなのだから。

「お前」といわれる情けなさは、その変化の兆しなのかもしれない。そう思いながら、自然の前で微力な人間もきっと何かができると信じて、精一杯生きてきた人と、これからも生きていく人たちの歴史を残したい。それがこの震災を取材する目的なんだろうと、走りながら考えている。

あごらめいと

アンデスのフェミニズムに燃える

サンディ サカモトさん

毎号連載の『ペルーの女たちは立ち上がった』の訳者、サンディさん。スニーカーとディバッグが似合うフレッシュな女性。エイジレスでボーダレスの地球人を主張する。

数年前、キャロル アンドレアスさんの著書、『女が反逆するとき』を読み、感動し、本人にコロラドまで会いに行った行動派。今、ペルーのフェミニズムに燃えている。連載の『ペルーの女は立ち上がった』はたくさんの写真を添えて、近く単行本になる。去年の三月は女たち数人で、〃国際女性デー・女のフェスティバル・京都〃でペルーの女たちの写真展を開いた。今年は女たちと在日のラテンアメリカ女性を招いたワークショップを開く予定。

女性問題に関心を持ち始めたのは

関心をもちはじめたのは九歳の頃です。男である父が主張し、女である母が従うという不平等な関係を見ていて、これではいけない、どこかが間違っていると思いました。母は父が間違っていても謝ったりしていました。父が寝室で手を二回たたくだけで、母は台所から走りより、父が「タバコ!」と言うと母がまた急いでタバコを持ってくるという具合でした。また朝は父の機嫌が悪いことが多く、味噌汁を壁に投げつけるということも日常茶飯事でしたので、子ども心に、母の二の舞はすまいと固く決意していました。小学校では「男女」の順番を変えて「女男」といつもノートに書いて、わずかな女の抵抗を表現していたものです。

アメリカにいらしたのは

アメリカに行った一番の理由は女性学を学びたかったからです。アメリカ

に行ってからは、女性学だけでなく、アフロ アメリカン学とかネイティブアメリカン学とかをやって、黒人の講師やインディアンの女性講師から直接話をきくことができ、マイノリティの女性たちと精神的にとても親しくなれました。

アメリカに行って初めて、自分がアジア人であるということを理屈ではなくはっきりと認識できたと同時に、白人社会で、あからさまにではなくともアジア人として差別される体験ができたのはよかったと思います。それと同時に、日本では差別制度のため平等になれない他のアジア人と、同等の立場に立ってつきあえるという機会にもめぐまれました。

それは人種差別と女性差別との深いつながりを教えてくれる貴重な経験でした。

専攻は

専攻は社会学。社会学を専攻したのは女性問題を理解する上で、社会システムや文化を理解することが重要だと考えたからです。社会の中で、女性やマイノリティの人々がどのような立場に置かれていて、どのような問題に直面しているかをくわしく説明してくれたのは社会学です。母がなぜ父に服従しなくてはならなかったか、女性が労働の場で、なぜセクハラを受け、低賃金で働かなくてはならないかを解いてくれたのも社会学でした。性差別は社会問題であるとはっきり認識することによって、人種差別や民族差別の存在も明確になりました。

その中でも一番根の深い女性差別は、人種的あるいは民族的に差別された男の人たちの中にも存在します。しかし、この差別は南と北とでは大きな格差があり、そのギャップを埋めきれないでいるのが現状ではないでしょうか。いま経済的に恵まれた側にいる女たちは、その格差を深く理解し、南の国の女たちが立ち上がるのを「助ける」という、上からの視点ではなく、「一緒に学びあい、分かち合う」という共生の視点をもてば、私たち女の未来も自ずから見えてくると思います。

ペルーの女の問題を知ったのは

キャロル アンドレアスさんの本『女が反逆するとき』を読んだのがきっかけです。彼女はペルーに住み、働き、先住民男性と結婚し、地元の女たちと草の根運動をしてきました。彼女は母系社会から受け継いできた燃えるようなエネルギーをもったアンデスの女たちの闘いを、彼女たちの側から伝

えてくれました。水道も電気もガスもない貧困の生活の中から、あきらめることなく、工場労働者として、農業労働者として、先住民として、家事労働者としての誇りをもって、抑圧もない収奪もない社会をつくるために立ち上がった女たちに心から感動しました。

それを知って感じたことは

ラテンアメリカの先住民女性たちは、長い間受け継いできた母系社会的エネルギーを今なお失わずもち続けています。それは長い封建社会の中で、私たち女たちが奪われてきたエネルギーであるように思われました。現代でいう男女平等という以前のパワフルな女たちの姿が、そこには存在していまず。スペインによる植民地政策の中で家父長的キリスト教が導入され、それまでのおおらかな先住民文化や男女関係は破壊され、マチスモなどという男性優位主義的思想も導入されてきましたが、女たちは大地的強さを失わず生きてきました。そこに私たち女が学ぶべき貴重なものがあると感じました。

また「開発」という中の海外からの経済援助は、多くの女たちを単なる低賃金奴隷にしています。それによって彼女たちの生活がうるおうことはありません。「開発」は彼女たちから土地を奪い、男たちを奪い、子どもたちをも奪ってきたのです。これは現在アメリカに代わってペルー最大の援助国となった日本に住む私たちの問題でもあるわけです。つまり、女性解放とは国内だけでは済まされない国際的問題になっているということです。

今、一番伝えたいこと

世界的に見ても六〇-七〇年代は、反戦運動、黒人解放運動、そして女性解放運動などが世界を揺さぶった重要な時期であったわけですが、その中の一つの共通点として世界の女たちが認識していることの一つには、社会変革運動の中に、女性解放の重要性がきちんと位置づけられず、常に後回しにされ、あるいは利用されてきたという事実があります。そのため、女たちは自分たちで運動を起こさなくてはならなくなり、それがリブとかフェミニズムという形で出てきたのではないかと思います。しかし、このような運動が比較的めぐまれた女たちの運動であったりして貧しい女たちのところまで届かず、社会を大きく変えるというところまで到達していないのが現状です。ペルーの女たちは、貧しい農業労働者、工業労働者、家事労働者、先住民として、社会の最底辺の立場にいながら、

なおかつそれぞれの立場から社会全体を変革する運動を繰り広げ、その中で、男性同志のマチスモをも批判し、着々と新しい社会を築きあげています。

読者に知っておいてほしいこと

残念ながら、日本ではラテンアメリカの情報が極度に少なく、ましてやラテンアメリカの女たちの運動については、テレビで見ることも、書物で見つけることも不可能に近いくらい困難です。しかし、キャロルさんが、フェミニストの立場から、ペルーに住み、先住民と生活し、草の根の女たちと団結し、闘ってきたことから生まれたこの本はまさに宝物のような存在といっても言い過ぎではないと思います。

キャロルさんの書いたあの本は学問的な本ではありません。これはキャロルさんの体験をもとにして書かれたもので、ペルーの女たちが直面してきた現実の姿であり、ラテンアメリカの多くの女たちの体験とも共通しています。彼女がこの本を書いたのも、彼女たちの状況、パワフルな闘いを世界の女性たちに知ってほしかったからです。この本を読むことによって私たち女の何かが変わってくると思います。

この本は誰が書いたとか訳したというよりは、多くの人たちの共同作業でつくられたコレクティブな本だというべきかもしれません。それは、キャロルさんが書いた時もそうであったように、本の訳にしても、多くの友だちや〈あごら〉の方々に助けられて初めてできたものだからです。

*

『ペルーの女たちは立ち上がった』は、これからますますエキサイティングな場面が展開します。「日本では日系人のフジモリでうまくいっていると思われているけれど、多くの女たちが理不尽に投獄され、獄中でレイプされたりひどい拷問を受けている。そういう事実もぜひ知ってほしい」と、最後に、さらに強調するサンディさんでした。

（ききて・斎藤千代）

看護婦 光と影 (22)

後藤登茂子さん（3）

増田れい子

午前八時きっかり、ナースステーションの中央では〝申し送り〟がはじまっていた。夜勤を終えた看護婦ときょうの日勤者が集まり、病棟婦長、主任をまじえて一人一人の患者の状態について報告者の説明をきき、ポイントをつかむ時間である。

五十人の患者について血圧や尿の出ぐあい、食事・睡眠の状態など、基本的な情報とその変化や推移について手短かに報告してゆく。それを一人一人が自分のメモに書きつける。どこの病院でもこの朝の〝申し送り〟から一日がはじまる。私などには聞きとれない術語の多い猛スピードの〝申し送り〟だ。

およそ三十分はかかったろうか。

その間にもナースコールが入れば誰かがすぐとんでゆく。

その朝の〝申し送り〟のなかで〝エーッ〟という声が起きたのは、前日救急から入った男の患者が異常行動に出た、というくだりだった。

陰部を露出して深夜勤の看護婦に迫るような目つきであたりを徘徊した、というのである。
〝コワかったです〟と若い看護婦はナサケなさそうな声をした。
またこの患者は病室のなかにとりつけられている洗面台の中に放尿したという。婦長は雑務を専門にこなす病棟要員に〝洗っておいて下さいね〟と連絡した。もちろん夜勤看護婦があと始末はしているわけだが、同室の患者の不愉快がつのらないように、あらためて洗浄しようということだ。
入院時からその患者は、情動不穏というのかベッドの上であっちを向いたりこっちを向いたり動きまわり、医師が何度もかけつけてしずめようとしたが、おさまらない。バイタル（血圧や脈拍、体温など）は正常で、医師も小首をかしげていた患者だったのだが、私はそっと記録をのぞかせてもらった。そこには幼時、広島で原爆にあっていたことが一行記されていた。家族の有無は彼の勤務している会社（陸運関係）に問い合わせても、一切わからないという。わかっているのは姓名と被爆の事実と勤務先と年齢だけであった。
意識を失って救急に運ばれ、神経内科病棟に送りこまれた。そうして、異常行動に出たというのである。
看護婦たちの間に緊張が走った。ともかくも注意深く見守らなければならない患者のひとりということだ。
〝申し送り〟が終わって早速私は後藤さんに従って患者のベッドサイドに立った。この病院では、ドアが吊りドアになっていて、大きなとってもついており、ドアの開閉が静かな上にラクだ。外に向かった窓、ナースステーションと向かいあった窓、ともに大きな一枚ガラスで、見通しがいい。
ナースステーションからは患者の様子が見え、患者の側からも看護婦の姿がいつも見えている。

重症者が多いだけに、互いにこの〝見える〟という関係がストレスを薄める結果になっている。
この、ナースステーションを中心にそれをとりまいて病室（ベッド）を配置するという方法は、ナイチンゲールの主張する病院の基本デザインだそうだ。
しかし、あちこちの病院に行ってみて、この方式をとっているところはそう多くない。なかには、まるで病室が見えないナースステーションというのもある。
ナースステーションと病室との関係ひとつまだ〝定説〟が出来上がっていないのだろうか。もどかしい思いがつのった。
ところで、病室にカーペットを敷きつめるというのは、ナイチンゲールが嫌ったことのひとつで、カーペットは不潔のもととナイチンゲールは主張している。しかし最近は技術が進歩して、毛ボコリの立たないカーペットが出来、清潔に保つ技術も生まれた。足音や器械音や人声など、騒音をしずめるためにカーペットは役立つ。それでこの病院ではカーペット採用にふみ切った。
病院内の騒音は三〇―三四ホンにおさえこまれているが、それには窓の気密性の他に、カーペットが寄与しているという。
最近東京都内の有名私立大学病院に約半年入院した私の友人は、何が一番つらかったかというとビニタイルの床を引きずる医師のスリッパの大きな無神経極まる音だったという。スリッパの音とひそひそ声が、患者の神経を引き裂く厄介者なのだ。
病床六尺。ベッドだけがすみかになる患者という境遇。不安これにまさるものはないだろう。医師と看護婦と家族と病友とテレビと窓の外の風景ぐらいしか頼れるものはない。
そういうとき、個室がのぞましいのか大部屋がすくいになるのか。一概にはいえないが、この病

院は四人一と部屋、四床で一室が基本になっている。これは新病棟に建てなおすとき、それまでは六床一室が基本だったが、患者は誰しもまんなかのベッドをイヤがる。ストレスが多いからだ。それで新病棟に切りかえるとき、まんなかの出来ない四床一室方式にかえたのだった。

後藤さんはベッドをひとつひとつたずねながら、患者と言葉を交わす。

八十四歳になるという白髪ゆたかな女性は「おはようございます」と大きな張りのある声をかけてくる。ガン告知を受けている患者さんだそうだが、その病室だけでなく他の病室のひとたちにも〝前向きのひと〟と知られていて、患者のリーダーのような存在。

「彼女にはいつも私がはげまされてるの」と後藤さん。「血圧もいいし、食事もおいしくいただきましたヨ」と明るくいう。ベッドまわりもきちんと片づけてある。

「定時の起床、歯みがき、うがい、洗面、身じまいといった日常の清潔を保つ行為。ADLというんですが、これをきちんとすることが、闘病の基礎なんです。これをいいかげんにすると何かぜんぶがガタガタになってしまう。病気でも日常の基本動作をおろそかにしないように、私たちいっしょになって努力するんです」

ある男性の白血病の患者はものすごい潔癖症で、独自の朝のマニュアルをつくっている。

①検温は自分がこの部屋で一番先にしてもらう②体温計は必ずアルコールでふいてから渡してほしい③食前にコップ、フォーク、スプーンを熱湯で洗う④一たん床に落としたものはスプーンでも何でも二度と使わない⑤牛乳は必ず白いコップでのむ⑥クスリは食器のフタの上に出し、スプーンで口に入れる⑦尿器は所定の場所におく。

これが一字一画狂ってもダメという患者さんなので、看護婦は自分のマニュアルのようにマスタ

ーして、介助する。

Dさん、白血病を告知された三十代半ばの男性は、何とこの病院とつきあいのある薬剤会社のいわゆるプロパー（営業マン）で、クスリについてはくわしい。また病気に関しても知識がある。だから自分に処方されたクスリを見れば自分の症状や病勢の進みぐあいがわかる。こういう患者のフォローはウソや心にもない慰みはきかないから誠心誠意で向かうほかない。

ただひとつ、よくも悪くも検査数値だけが基準だ。一週に一度出る検査数値。それを客観的な基準として、よければよろこびあい、問題があれば改善のための努力を互いに確認しプランを話しあう。

後藤さんはいった。

「Dさんの数値を見てゆくとひとつのはっきりした特徴がつかめたんです。それはね、自宅に帰って、家族と生活して戻ってきたあとの数値は必ずいいの。ですからなるべく外泊ができるように看護計画をたてて、病院での直接の治療とケア、自宅でのケアをないまぜて経過をみてます」

家族との関係が、スムーズにいってない患者も少なくない。そのストレスが病気以上に患者の悩みのタネになり、闘病の意思をにぶらせたり、絶望的にさせたりする。そういう背景も十分にアタマに入れて、それでもその家族のくらしのなかから光の部分をさぐりあてはげましてゆくのも、看護婦の仕事である。ときにはケースワーカーを入れて、患者とその家族とじっくり闘病のプランを組み立ててゆく。

Eさんは四十代半ばの男性で、重症筋無力症にかかっていた。これはきびしい病である。症状が進めばからだ中の筋肉は働かなくなり、呼吸もできなくなるおそれがある。視力も保てなくなるかも知れない。

告知をいつするか、精神状態を見なければなかなか告知はできない。後藤さんはその判断材料を医師に提供する役割を強く意識している。重症の難病である事実を患者自身が受け入れられる状態かどうか。やがてはクルマ椅子の上の生活を強いられ、呼吸器なしには生きられなくなる。職業は住居は、家族の支援は……。この重圧に耐えてゆけるか。耐えるにはどういう態勢をつくらなければならないか。なるべく長くEさんと接触して、感触を得なければならない。後藤さんはEさんをリハビリに連れ出した。クルマ椅子を押してEさんとEさんの妻と言葉を交わした。余人のいる病室ではお互い話しにくい問診でも、リハビリの場だと人目を気にせず話せる。

妻が職業を投げうっても、夫の介護に専念する覚悟という。しかし、こどもたちとは発病以前から断絶状態だという。どういう援助が可能か……後藤さんにとっても難問中の難問のようだった。

○

日勤は午後四時まで。その間昼食休憩が入るが、三十分もとれただろうか。

前夜、異常行動に出て、夜勤の看護婦をこわがらせた患者は脳炎とわかった。三十九度の発熱が襲って、あの異常行動も脳炎が原因だったのだ。一時は〝仮病なんじゃないか〟と医師までうたがったほど、真因がつかめなかった。そしてこの患者のベッドサイドには看護婦の姿がこの日、片ときも消えなかったことをつけ加えておこう。

日勤のあとひと休みして私は後藤さんと深夜勤に入った。

日勤者が続けて深夜勤につくのは非常にきついが、この病棟では月に一回か二回は日勤深夜がまわってくる。なかには三回まわってくる場合もある。たまには日勤深夜、また続いて深夜を重ねることもある。体調のリズムをどうやってととのえるのだろうといつも心配になるのだが、日本中の

病院で看護婦たちは黙々とこういう過酷な労働を続けている。

この病棟の深夜回数は準夜と合わせて平均八回におさえられているから上等の部だ。でも誰か一人でも病気で欠勤ということになるとパニックが起きる。働きはじめて三年目に退職する例がどこの病院病棟でも多いのだが、これは、かぜぐらいでは休めないムリな勤務は、いくら若いひとでも三年までが限度と読み解くべきだろう。

後藤さんはその朝、ひとりの若い看護婦から手紙をもらっていた。忙しくて長い話ができないので、看護婦たちは、訴えたいことを手紙にしてリーダーに出すことが多い。レポートといっている。

書いた看護婦さんはまだ二年目。体を悪くしてしまったのだ。必死に勤めていたが体がいうことをきかなくなったと訴えていた。喘息の上にジンマシンにせめられ、手がカユくて患者の清拭すらできない状況になってしまった。「いまがガマンのしどきと歯を喰いしばりましたが、涙が出てきて患者さんのケアすらできない。話もしかけられない私。私はいったい何をしてるのだろうと考えました。まわり道のようだけれど、まず自分の体を健康にしなければ。健康を改善したら復職しようとようやく心を決めることができました」

後藤さん自身も不調に見舞われた経験がある。胸にしこりができていた。切開した結果良性のものとわかったのだが、過労が引き金になって不調におちいる看護婦は多い。

午前零時から八時まで、が、深夜勤帯である。しかし、日勤者への引きつぎや記録や婦長や医師とのコミュニケーションなどのために九時半ころまでは残業する。月に三十時間は残業する。ちなみに後藤さんの手取り月給は三十万円。

午前零時。病棟は照明を落とし、明るいのはナースステーションだけになる。深夜勤は三人で組

む。準夜勤（午後四時―十二時）は三人か四人。日勤（午前八時―午後四時）は日によって異なるが、だいたいウイークデーは十三人から十五人、土・日・祝日は八人から十人の人員配置になる。

深夜勤三人の中の一人をチームリーダーにする。ベテラン一と新人二の組み合わせが多い。リーダーはベテランがなる。

「看護婦って夜は寝てるのだとばっかり思ってた。入院してはじめて看護婦さんは夜、寝ないと知った……なんていわれることもあって、ほんとに私たちのことって世のなかに知られてないんだなとショックだったことがありますよ」

後藤さんにいわれて私もびっくりした。

看護婦さんの労働過重が話題になり人員不足でナースウェーブが起きているというのに、女の世界でのできごとというと、目も耳もかさない、興味も示さないひとたちが多いらしい。自分が入院してケアされる段になってはじめてその存在と重さを知る。しかし治って社会に復帰するとすぐまた忘れてしまうのだろう。

女の苦労は、どうしてこうも見過ごされてしまうのだろう。女なら苦労してあたり前と打ち捨てられてしまうのだろうか。

後藤さんはベッドサイドを巡回する。懐中電灯をこわきにはさんでいるが、そのライトを決して直接患者にはあてない、照らさない。ライトを下にこわきにはさんだその照り返しで患者の顔色、苦痛の有無、変化を素早く見てとる。吊り下げた点滴の輸液がセットされたとおり正常に落ちているかどうかをたしかめる。すき通ったクダの中を液がチカッと光って落ちてゆく。後藤さんはそっとベッドサイドを離れる。

Dさんのベッドのまわりに吊されたカーテンの一部がぼうっと明るんでいる。深夜二時。後藤さんはその明るみに近寄って声をかけた。

「寝みましょう、ね、ね」やさしくいい聞かせている。あのプロパーのDさんだ。眠れぬままにTVゲームでなぐさんでいたらしい。

後藤さんの、やさしい声で、Dさんはゲームをやめ、寝具にもぐりこんだようだった。

○

ナースステーションに戻る。後藤さんは掃除をはじめた。流し、棚、デスク。目に入る限りの備品をふき掃除する。

ナースコールは二十分おきぐらいに鳴る。潔癖症患者のコールだ。後藤さんがかけつける。尿をとってほしいというのだった。「自分のペニスを触りたくないっていうのよ、フケツだと思ってるらしいの」と後藤さんは洩らした。これも患者の個性。受け入れる。

コールとコールの間に記録の記入。

午前四時、Hさんのコールがあった。筋萎縮症患者で、呼吸困難になりやすい。やはりそうだった。呼吸できず苦しいと訴える。ベッドに腰かけ上体をエビのように曲げ苦しがる。とぎれとぎれの訴えでは夜十時ころから苦しくなってきたがともかくガマンしてきた。急にひどくなり、ナースコールした……と。

呼吸困難は突如襲ってくる。後藤さんはこれは重大と判断し、とっさに当直医に連絡。ものの二、三分で医師がかけつけてきた。幸運にも呼吸器専門のベテラン医が当直していた。

ただちに点滴にプレドニンを入れ、レントゲンをとる措置をする。深夜勤の三人総がかりで素早

い対応をした。そこへナースコール。

点滴切れのコール。これは私が連絡してすぐ措置できた。Hさんのレントゲンもただちに撮影。その結果がまたたく間に送られてきた。四時半。しかし油断はならない。後藤さんは医師と相談して家族に連絡をとった。

ほんの少しの判断のおくれ、医師とのコンタクトのズレなどから大事に至ってしまうこともある。ともかく早い対応が、かんじんカナメだ。

後藤さんは的確に乗りきった。一時間半後家族（妻と長男）が到着した。危機は回避できて安堵がそれぞれの疲れた表情をやわらげている。いい風景だ。

六時。ベッドサイドを巡回。起きているひともいるし、まだ睡眠中のひともいる。免血患者（白血病）の命綱は睡眠と点滴だから、寝ているひとは自然に目ざめるまでそのままにしてムリやり起こすのはやめましょうと後藤さんはいった。

起きた順に検温。血圧測定。歯みがき。うがい。点滴の点検、そして食事となる。

申し送りを終えて、休けい室に落ち着いたのは、九時半。みると後藤さんが少しプリプリしている。Hさんの危機回避について、〝そんなの当たり前〟という声が聞えてきて、カチンときたらしい。

その場にいたものにしかわからないドラマというものがある。評価はなかなか適正には下されないものだ。現場を知るもの同士、肩を寄せあって「よかったねぇ」と確認する。

熱いコーヒーをつくってのんだ。コーヒーとはこんなにおいしいものだったか。

不眠不休、そして危機も経験したこの深夜勤の九時間半。私もふくめて深夜勤チームの頬は少し青白かったが、太陽の光がそっと紅をともしてくれた。

（この項おわり）

ペルーの女は立ち上がった 10

第四章　農業改革と村の女・山の女 (2)

キャロル アンドレアス
訳　サンディ サカモト

山岳地帯の女たち

ケチュア語とアイマラ語を話すアンデス山脈の女たちは、スペイン文化に対して激しく抵抗してきた歴史を持っている。メスティーソには知られていないものの、このような歴史とコミュニティを維持するための重い責任をもつアンデス山脈の女性たちは、人々にとても尊敬されている。しかし、このような先住民の女性たちは、差別と極端な搾取の対象にもなっている。仕事の報酬をほとんどもらえず、社会保障や医療を受けることもできない。またアンデス山脈のインディオの出生率は高く、子どもの存在は高く評価されるが、一年以内に約三分の一が死んでしまう。また、大多数のインディオ女性は文盲だ。資本主義経済の関わりもあって、正式な教育を受ける必要性が増したにもかかわらず、過去十年間で、女性が学校に行けるチャンスはかえって少なくなっている。実際、インディオの女性は、近代的な分野ではなく先住民の伝統文化の中で働いており、自分たちの未来

と土地と文化の未来を一つにして見ている。
このような山岳地帯の女性は何度も自分たちのコミュニティを守るために激しく抵抗してきた。しかし、女たちが歴史上自分たちを共同参加者として見直し始めたのは、多分ここ二、三年であろう。複雑な、矛盾している政治的環境において、コミュニティメンバー、労働者、母、娘、大衆闘争のリーダーとしての自分たちの新しい場を見いだそうとしている。

インディオの生活と抵抗

自分自身をインディオだと考えているペルーの人々（国の人口の約半分）のほとんどが、公に認められた先住民コミュニティのメンバーである。スペイン人に征服された後、インディオは、征服者からある種のコミュニティをもつ権利を与えられた。それはスペイン人に征服される以前に女と男が平等な力をもったインディオの集まり、アイユにも似たコミュニティであった。先住民コミュニティのメンバーは、後にスペイン人によって、男性支配による政府と市政をつくるよう強制され、またそれは英国によっても強化されたが、決してコミュニティ構造が破壊されることはなかった。ある山岳地帯では、公の土地の売買は夫によってのみなされるという法律がつくられた後でも、土地使用権はまだ母親から娘、父親から息子へと受け継がれてきた。また男性コミュニティメンバーしか市の役人に選ばれないにも関わらず、女性のほうがコミュニティと深く結びついており、娘のほうが息子より多くの土地をもらうことが多いのも事実である。一般にインディオは、男も女も一緒に共同の土地を耕す。家族の土地は女が耕すが、場所によっては家族から遠く離れた場所で、女

たちだけで家畜を放牧するところもある。しかし、コミュニティの外での有給の仕事は性的役割分業になっており、常に男性に有利だ。

四世紀も続いたヨーロッパと北米による長期の支配を通して、コミュニティの土地の強奪とインディオの虐待は長く続いた。しかし、それに対するインディオの抵抗は政府に定期的な改革を強いた。改革のもとで、コミュニティは幾らかの土地については権利を持ち続けることができた。そのような土地は人々に没収される恐れが常にあったが、コミュニティの土地として、また共同の家畜放牧の場所として使われ続けた。先住民のコミュニティによる合法的闘いは、法廷ではいつも勝利に終わったが、実際の土地は横領者の手中にあった。インディオは時折、土地奪い返しの運動をした。たとえ虐殺される危険があっても、女性は常にこのような闘いのために動員された。一九六〇年、高度に組織化された先住民の人々は、特にシエラ中央の地主に対する幾つもの闘いに、ついに成功した。特にゲリラ戦に参加した若い女性たちは、料理や縫い物などの補助作業を男たちと一緒にしながら闘うことを主張した。

反対派からの圧力のために、ペルー政府は、土地改革をせざるを得なくなった。そしてそれは米政府にも「進歩のための同盟計画」の一環として支援された。しかし、土地改革は有力な封建地主に反対された。一九六八年のクーデターによって、改良主義者の陸軍将官は権力を握った。そして先住民コミュニティが正式に認められ、彼らの重要事項の一つ、法律上の権利と義務が明確にされた。しかし、そのような権利はすべて男性だけに限られていた。それにもかかわらず女たちが土地改革を支援したのは、土地改革がコミュニティの土地から大地主を追放することを意味したからであった。

一九七〇年代初期、先住民コミュニティが存在した山岳地帯では、土地改革がゆるやかに行われた。外国資本の農園をつくるために、太平洋沿岸の土地は没収され、政府の取締りのもとで近代資本主義的集団農場がつくられた(注46)。またこれは、今までの山岳地帯の土地の没収と比べると外国資本家にとってずっと楽であった。機械で耕され、輸出用に生産するための沿岸農場は、政府プログラムにとっても当然重要なものであった。山岳地帯では、地主が改革を延期するよう地方自治体に圧力をかけることができた。しかし土地が没収されたところでさえ、先住民は政府から少しも援助を与えられていなかった。信用貸しや技術訓練は男性にのみ与えられ、女性にはけっして与えられなかった。協同組合は、土地改革のもとで生産を管理するためにできたが、生産物の売買のコントロールもできなかった。政府は労働者の返済した金で、もと大地主に町の産業に投資させようとした。しかし労働者は借りた金を返すことができなかった。水使用税は土地改革によってもたらされたひどい弊害であった。メスティーソである元地主は、インディオに土地を戻す前に、家畜や道具を持ちさり、建物を壊すことさえ政府に認められていた。ある者は親戚の間で所有物を分配したり、没収を避けるために個人的に財産の一部を売ったりした。

インディオ保護の名目の下で

ペルー大統領だったベラスコ陸軍元師もインディオ出身であった。この時期に彼は、人々の愛国心を育てることによって国を統一したいと思った。彼は、時々ケチュア語で人々に話し、旅行者にペルーを魅力的に見せようと、文化的伝統を回復することを人々に奨励した。しかし、メスティー

ソや白人に反対して、インディオを統一する役目を果たす先住民運動が復活するのを防ぐために、政府は協同組合のために働く人々と先住民コミュニティのメンバーを表現するのに「カンペシーナス」という言葉を使い始めた（インディオという言葉を使わせないようにするため）。カンペシーナス（先住民コミュニティの農民労働者）という言葉ができた背景と農民協同組合の政府管理農業構造とが重なり合う。このようなコミュニティの中には地方自治体さえできた所もあったが、これは常に家族と社会における女性の地位を低くした。

政府は、インディオを、農民とかカンペシーノ（農民あるいは農民労働者）とか呼ぶことがインディオに対する人種差別をなくすことにつながると宣伝し、主要な左翼政党はそれを支援した。また、それまで、土地改革が資本主義発展をうながすことになり、帝国主義の利益に従属することになるという理由で、改革にひどく反対していた政党や組織までもが、急進的な変化をもたらす可能性のある一部の改革プログラムを推進するために動いた。さらに不幸なことに、その中には、農地改革法が女性を二次的存在として扱っていると批判した組織は一つもなかった。

シエラで改革を実行することが、妨害されているということ、またもし改革されたとしても、自給自足のための生産を犠牲にして、輸出用の生産が奨励されることによって、生産力の低い地域の農民が、都市の住民に食物を供給するように圧力をかけられることになってしまう。生産物の価格は、農民による投資を考慮しないで決められていた。シエラ（山岳地帯）では自給自足で暮らしている農民や地方市場のために生産している者が、水を使用するのがますます困難になってきた。そして地方では家族が生活できなくなった。このような貧困と農民に対する極端な収奪のために、また、町に出れば仕事が見つかるだろうという安易な思いとが重なり、大勢の農民が地方から町へ移

住し始めた。このようにして、一九五〇年代に、改革のもとで移住は始まり、急速に進んだ。

ペルー農民同盟と女たちの抵抗

一九四七年に設立されたペルー農民同盟は、農地改革のもとで、農民の権利が尊重されることを保証し、農民が容認できる方法を主張するために、一九七〇年半ばに活発になった。ペルー農民同盟はとても強く、政府と地主が衝突しているのに乗じて、大々的に「土地の奪い返し闘争」を先頭にたって進めた。一九七四年はペルーの歴史上どの時期よりも、中央シエラで土地が最も多く返還され、コミュニティのメンバーによって管理ができるようになった時期でもある。四万以上の農民が一つの県で一五〇区画もの土地を取り戻した。

農民が組合を通して蜂起を組織するとき、全国的規模で統合することができた。農民は、組合活動を通して、政府に押しつけられている重税や負債に反対し、役人としてのポストを与えられた元地主が、政府を使って個人的利益のために生産しようとしているのに反対した。農民は、今すぐ没収されそうもない土地を地主が売買しようとする実態を暴き、また市場での売買や生産物の分配における汚職を暴露した。

地方の反乱は、労働者やスラム住人に約束したことを守らなかった政府に反対する都市のストや蜂起へとつながっていた。ペルー政府はペルー農民同盟に対抗するため「農業同盟」を設立した。この新しい同盟の前提は、土地は労働者のものなので組合は要らないということだった。しかしこのような政府組織は組合支援派によって奪い取られ、反政府側の動きを食い止めることはできなか

った。こうして政府は、反政府勢力の強い地域を占拠するために、軍隊をおくった。そのため多くの農民が投獄されたり、殺されたりした。
この頃、地方の女性たちは大地主から土地を取り戻すのを援助するため、特別隊をつくっていた。彼女たちは「土地奪い返し闘争」になかなか参加しない男たちの体に色をぬったり、地主に渡したりして罰した。男女の農民たちが「土地奪い返し闘争」を推し進めている間、女性たちは地主を捕虜として捕まえて縛った。女性はいつもデモや「土地奪い返し闘争」の先頭に立っていたが、女性たちは、自分たちの社会的地位を脅かす改革の規定を組合がそのまま受け入れてしまったことを、問題にしなかった。またコミュニティから都市への移住を強制していた政府の「近代化」政策にも女たちはグループとして反対しなかった。

後退した山岳地帯の女性の地位

一九七〇年代半ば、農地闘争のリーダーとして現れたシエラ（山岳地帯）の多くのインディオの女性たちは、一九七五年に軍の弾圧が終わると、家庭や農作業に戻った。他の農民と同じように、彼女たちは家畜を飼ったり、農作業でできたほんの少しの農産物をマーケットや通りで売ったりした。雨の後、壊れたレンガの家を直すのを手助けしたり、料理のために水を家に運んだり、小川や大きな川で洗濯をしたり、売れそうなときは民芸品や食べ物を旅行者に売った。彼女たちは、農地改革によってできた協同組合にはめったに入れてもらえなかったし、政府によってつくられたリガス　アグラリアス(Ligas Agrarias—農業同盟)で活動させてもらえるわけでもなかった。

農民協同組合で女性が活発に参加することは、男性たちに期待されていなかった。例えば、組合会合の時、女性は食事をつくることになっていたが、食事の後、女たちが聞きにくると、コミュニティのためによく働いたと感謝され、家で休むように言われることからもよくわかる。組合に参加した者が、女性の置かれている特別な状況——例えば子どもの世話、学校、健康管理、家庭内暴力——あるいは組合内の女性差別などを問題にすることはほとんどなかった。もし組合に参加した数少ない女たちが、このようなことを問題にすると、組合内で得た力を失ってしまうし、夫によって罰せられてしまう。このような夫は、公には女たちを弁護しても、家では女たちを批判したりするものなのだ。

先住民コミュニティの中で、女性農業労働者は、ある程度合法的な権利をずっともち続けていた。

洗たくは「女の仕事」だ。冷たい水で一日中洗たくをする女たちのほとんどが、最後には呼吸器疾患に倒れる。

特に夫が留守の時は、女性がコミュニティの会合に参加し、選挙することが当然とされていた。これは組合の会合とは対照的だ。先住民コミュニティの会合では、アイユが生きている。普通、この会合は母語で行われた。女たちが、男たちと同じくらい力があったインカ支配以前のように、女たちはグループの中に座ったが、いつのまにか、女たちは呟くだけになっていた。こんなときでさえも、男たちに、「なぜそんなに騒ぐんだ?」と眉をひそめられた。女たちは主張するにはするが、笑われたり、無視されたりした。女たちは男たちが何を決めても賛成しなければならないようになっていた。時折、グループとして、女性が自分たちの権利が侵されたと思ったとき、そのうちの一人がグループの代表として会合を中断した。女性のスポークスマンは時折コミュニティの代表の役割をした。

ついに、一九八〇年代、ひき続く景気後退の影響のもとで、組織的に女性が従属的な地位に置かれていたことが問題になった。全国の女性たちが、「ノイズメイク」(注47)の過程をつくるためにコミュニティ内で女性の参加を促し始めた。後にわかるが、今度は全国的規模で、農民組合や民衆組織に参加する準備として女性の参加を真剣に呼びかけたのだった。

〔注〕

46 「資本主義的集団農場」という言葉は学者によって使われている。当時、政府は改良プログラムについて説明するのに「資本主義的」という言葉を使うのを避けていた。

47 いつも男たちに騒いでいると言われているため、それを逆手にとった言い方。

◆日、一日と春の陽がまぶしいこの頃、お元気にご活躍のこととお喜び申し上げます。

さて、先日は『あごら鳥取編』二〇三号をありがとうございました。JCJ事務所の棚に貴誌が並んでいる事は知っておりましたが、手に取って読むのは初めてでした。

今回私も北京会議に地域の人と共に参加すると思いますので、大変役に立つ記事が多かったと感じました。また、『ペルーの女は立ち上がった』は、大変関心のあるテーマでしたので、注意深く読ませていただきました。南米の情報は、私たち市井にはなかなか伝わって来ず、中南米の人々の生活とアメリカの影は、今後の世界に大きな課題を残すように感じられます。

個人的には、女性問題という〝くくり〟に女性がしばられることのない社会を希っています。

御誌が益々多くの読者を巻き込んで、社会に発言する場となりますことを希います。　（東京　森田美子）

＊

◆やっと少しずつ、あたたかくなってまいりました。被災地の方々にとって一番、待ってらっしゃるものでしょうね。

「どうぞご投稿を」というあたたかいお言葉頂きましたのに、まだ怠けています。……と　いいますのは次々とあたらしいことを発見してます。私は、今〝敗戦五十年企画〟の中の〝アジア教科書展・韓国・朝鮮〟の方に入れて頂いてます。私が生まれた一九二二〜一九二八年までの朝鮮の子どもが学ぶ教科書をみて、びっくり。3・1から朝鮮総督府が方針を変え、弾圧から、ゆるやかな方針へと変わっていったのがわかりました。私は二九年に小学校へ入学、大正デモクラシーの中で成長した教師によって、まったく自由な空気の小学校生活を体験しました。

それはわずか数年でおわりましたが、あれから日本の教育界は今日まで自由がないのです。当時の日本ではどうだったのでしょう。関心がでてきました。投稿はもう少し遅れます。これを機に調べてみたいのです。いい機会をくださってありがとうございます。

（奈良県　池田正枝）

＊

◆今回の災害では、自衛隊の出動について、割り切れない思いがしました。災害救援で果たした現実は評価しつつも、出動の遅れ、救援道具不足、救援

訓練の不足などのマイナス面を押し出しました。軍隊の目的は、いかに敵を殺すか、倒すかにあり、自衛隊の装備も日常の訓練も、人を生かすという視点はありません。

だからこそ、常設の緊急救援隊の設立の声をあげるべきだと思います。一九九二年秋、「ニッポン国際救助隊」の設立を呼びかけた広島大の水島助教授は、「今こそ非軍事の『国際救助隊』が作られるべき」と述べています。

（山形県　菅野真治）

【編集後記】

◆一月二十八日、土曜日の夕方。斎藤さんが来阪されました。北京女性会議へ向けての講演会に出られるという前日です。急きょ、〈あごら大阪〉の仲間が集まりました。八名、初顔合わせが三名、斎藤さんを囲んでの新年初会合となりました。

一月十七日未明に発生した阪神大地震から十日あまり経って、生活は少しずつ立ち直ってきつつはありましたが、大阪駅周辺は、ジャンパーにスニーカー姿、大きなリュックを背負った人びとが大勢往き来していて、以前のような落ち着いた街のにぎわいには程遠い雰囲気でした。新幹線は新大阪・姫路間は不通、東海道・山陰線も芦屋以西、阪神・阪急の私鉄も途中までしか動いていない状況でした。断続的な余震におびえながら、集まった人たちの中にも身内の被災者を受け入れたり、救援にかけつけたりした人がいて、その日の話題もつい震災のことになりがちでした。関西でのこの大きな経験について、大阪から発信することになり、それぞれ報告することにしました。

〈市民いきいきネットワーク〉を結成して、女性候補を立て、初めての選挙に挑戦するという小谷訓子さんたちは、斎藤さんとの話し合いに大きな期待をもって出て来られたのですが、その点心残りだったようです。

（大阪　山際美代子）

*

◆〈大阪〉の皆様はじめ、全国からの熱い思いで特集号が出せました。

これは支援の第一歩です。引続きいろいろな視点でご投稿ください。

サポートは始まったばかり、今の熱い思いが決して一時的なものにならないよう、息長く考え、行動していきたいと思います。一冊でも広めて下さい。売上は支援活動に使います。

地方選に立ち上がった女性たちの紹介コーナーも設ける予定でしたが、思いがけずたくさんの原稿が集まり、それは次号に回すことになりました。

統一選に間に合うよう、四月号は早めに出します。あなたが推薦したい方をぜひお知らせください。（東京　事務局）

〈私たちの提言〉――第三回ワークショップ

阪神大震災と自衛隊

〔問題提起〕自衛隊の増強、八三条改正は必要か

杉井静子（弁護士）

「安全を保障する」ということ

斎藤千代（あごら編集部）

3月30日（木）午後6時〜9時、新宿女性情報センターで。

（TEL 3341-0801 都営新宿線「曙橋」下車A4出口から2分）

〈私たちの提言〉は、戦後五十年、女性たちが積み上げてきた政策を形にしようという試みです。講演会ではありません。全員で知恵を出しあうワークショップ。お誘い合わせどうぞ。ご参加をお待ちしています。

阪神大震災――女たちは動いた　●発行　1995年3月28日
●編集　あごら大阪
●発行所　BOC出版部　〒160 東京都新宿区新宿1-9-4-303
●TEL 03-3354-3941　●FAX 03-3354-9014　●振替00100-0-5264
●発行人　あごら企画会議　定価957円（929円＋税28円）

この　ひろい宇宙に
たった一つの地球
その　大きな地球に
たった一人のわたし
そして　あなた
かけがえのない地球
かけがえのないわたし
かけがえのないあなただから
たいせつに　たいせつに　しよう
あなたも
わたしも
地球も
たった一度きりの人生だから
思いきり
のびやかに生きよう
だれもが　だれをも
ふみしだくことなく
胸の底まで深く息をし
ああ　生きててよかったねと
ほほえみあえる地球にしよう
〈あごら〉
人と人の出会うひろば
〈あごら〉
人と人の共に生きるひろば

女による女の BOC 出版部
〒160 東京都新宿区新宿1-9-4-303(中公ビル)
ISBN4-89306-038-4 C0036 P957E
定価957円(929円＋税28円)